高松市埋蔵文化財調査報告　第２１３集

飯田西１３号塚・１４号塚・１７号塚・１８号塚・２３号塚
紙漉２５号塚

2020 年 5 月

高松市教育委員会・アイラックホーム株式会社・株式会社ロータリーハウス

例　　言

1　本書は、飯田西１３号塚・１４号塚・１７号塚・１８号塚・２３号塚及び紙漉２５号塚の発掘調査報告書である。

2　調査地、期間及び調査面積は、次のとおりである。

調査地　　高松市飯田町／檀紙町

調査期間　　平成３０年７月９日～７月２６日／令和元年１２月３日～１２月５日

調査面積　　６４㎡／６㎡

3　本調査を実施するにあたり、高松市・高松市教育委員会・アイラックホーム株式会社（業務期間中に株式会社ゆめハウスから名称変更）・株式会社ロータリーハウスは「飯田町および檀紙町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。

4　発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、全額アイラックホーム株式会社・株式会社ロータリーハウスが負担した。

5　現地調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員　高上拓が担当した。

6　整理作業は高上が担当した。

7　本報告書の執筆・編集は高上が行った。

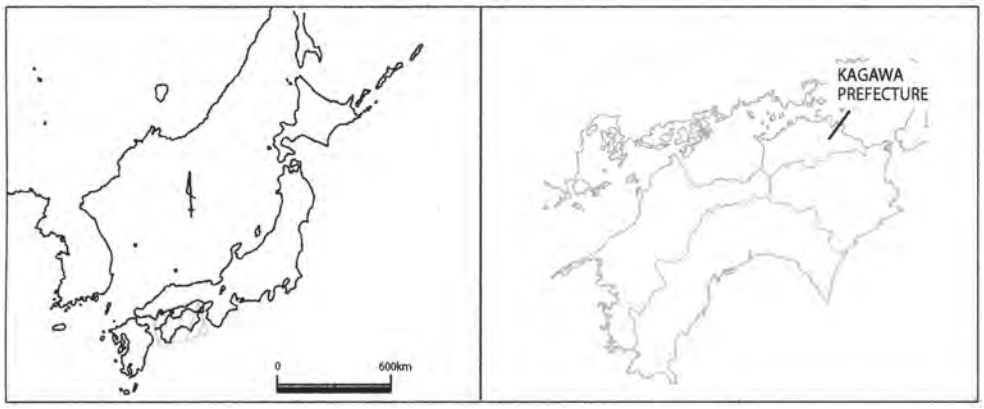
8　発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関及び諸氏から御教示及び御協力を得た。

松田　朝由

9　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は世界測地系第Ⅳ系にしたがった。

10　遺構の縮尺については図面ごとに示している

11　上記で得られた全ての資料は、本書刊行後に全て高松市教育委員会で保管している。



目　次

第１章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1

第２章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯…… 5
　第２節　発掘調査の経過…… 5
　第３節　整理作業の経過…… 6

第３章　調査成果
　第１節　調査と記録の方法…… 7
　第２節　飯田西１３～２３号塚の調査…… 7
　　第１項　確認調査の成果…… 7
　　第２項　塚の位置関係…… 9
　　第３項　飯田西１３号塚…… 10
　　第４項　飯田西１４号塚…… 13
　　第５項　飯田西１７号塚…… 21
　　第６項　飯田西１８号塚…… 24
　　第７項　飯田西２３号塚…… 25
　第３節　紙漉２５号塚の調査…… 25

第４章　まとめ
　第１節　遺構の変遷…… 31
　第２節　塚の性格の多様性…… 31

挿　図　目　次

図１－１　高松市の地形図と調査地位置…… 1
図１－２　調査対象地周辺の埋蔵文化財包蔵地…… 3
図１－３　調査対象地周辺の塚の位置関係…… 4
図３－１　試掘トレンチ出土遺物…… 7
図３－２　試掘トレンチ平断面図抜粋…… 7
図３－３　１３～１８号塚　平面位置と試掘トレンチ配置…… 8
図３－４　２３号塚平面位置と試掘トレンチ配置…… 9
図３－５　飯田西１３号塚平断面図…… 11
図３－６　飯田西１３号塚出土遺物…… 12
図３－７　飯田西１３号塚出土石造物…… 12
図３－８　飯田西１４号塚平断面図…… 14
図３－９　飯田西１４号塚　石囲区画及び中央土坑平断面図…… 15
図３－１０　飯田西１４号塚出土石造物…… 17
図３－１１　飯田西１４号塚出土石造物断面重ね図…… 18
図３－１２　飯田西１４号塚出土遺物…… 19
図３－１３　飯田西１７号塚平断面図及び出土遺物…… 22
図３－１４　飯田西１８号塚平断面図及び出土遺物…… 23
図３－１５　飯田西１８号塚出土石造物…… 24
図３－１６　飯田西２３号塚平断面図及び出土遺物…… 24
図３－１７　紙漉２５号塚位置図…… 26
図３－１８　紙漉２５号塚試掘トレンチ位置図…… 27
図３－１９　紙漉２５号塚平断面図…… 28
図３－２０　紙漉２５号塚出土遺物…… 29

挿　表　目　次

表２－１　整理作業工程表…… 6

本　文　中　写　真　図　版　目　次

写真１－１　飯田西１５号塚（南東から）…… 4
写真１－２　１５号塚上の石造物…… 4
写真１－３　飯田西１６号塚（北東から）…… 4
写真１－４　１６号塚上の石造物…… 4
写真３－１　１３号塚出土石造物…… 12
写真３－２　１３号塚東西断面東壁石造物出土状況（南から）…… 12
写真３－３　１４号塚東西断面（北から）…… 16
写真３－４　１４号塚　石造物検出状況①（南西から）…… 16
写真３－５　１４号塚　石造物検出状況②（北東から）　16
写真３－６　１４号塚　石囲い区画（南から）…… 16
写真３－７　１４号塚　中央土坑断面（北東から）…… 16
写真３－８　１４号塚　完掘状況　奥は１５号塚（東から）…… 16
写真３－９　飯田西１７号塚断面（北から）…… 21
写真３－１０　飯田西１８号塚断面（北から）…… 24
写真３－１１　飯田西２３号塚断面（西から）…… 24

巻　末　写　真　図　版　目　次

写真図版１
　飯田西１３号塚調査前状況（南から）
　飯田西１３号塚表面清掃後状況（南から）

写真図版２
　飯田西１３号塚東西断面（南から）
　飯田西１３号塚南北断面（西から）

写真図版３
　飯田西１３号塚調査中遠景（南東から）
　飯田西１３号塚アゼ中の石造物（南から）
　飯田西１３号塚　塚の規模（南西から）

写真図版４
　飯田西１４号塚調査前状況（東から）
　飯田西１４号塚表面清掃後（南東から）
　飯田西１４号塚　表面清掃後（北東から）

写真図版５
　飯田西１４号塚南北断面（東から）
　飯田西１４号塚東西断面（北から）

写真図版６
　飯田西１４号塚　石造物検出状況（北東から）

写真図版７
　飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（南から）
　飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（北から）
　飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（北西から）
　飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（南東から）
　飯田西１４号塚　五輪塔地輪地輪と火輪（北東から）

写真図版８
　飯田西１４号塚　完掘状況（東から）
　飯田西１４号塚　中央土坑検出状況（南から）
　飯田西１４号塚　中央土坑断面（北東から）
　飯田西１４号塚　中央土坑完掘状況（南から）
　飯田西１４号塚　中央土坑完掘状況（東から）

写真図版９
　飯田西１７号塚　調査前状況（南から）
　飯田西１７号塚　表面清掃状況（南から）

写真図版１０
　飯田西１７号塚　東西断面（北から）
　飯田西１７号塚　完掘状況（南から）

写真図版１１
　飯田西１８号塚　調査前状況（北から）
　飯田西１８号塚　表面清掃状況（北から）

写真図版１２
　飯田西１８号塚　東西断面（北から）
　飯田西１８号塚　完掘状況（北から）

写真図版１３
　飯田西２３号塚　調査前状況（南西から）
　飯田西２３号塚　表面清掃状況（北西から）
　飯田西２３号塚　断面（南西から）

写真図版１４
　飯田西１４号塚　石造物集合
　飯田西１３号塚　石造物集合

写真図版１５
　飯田西１４号塚　出土遺物集合
　飯田西１４号塚　須恵器蔵骨器か
　飯田西１４号塚　土師器蔵骨器

写真図版１６
紙漉２５号塚　調査前状況（南から）
紙漉２５号塚　表面清掃状況と規模（南西から）

写真図版１７
　紙漉２５号塚　石囲区画検出状況（南西から）
　紙漉２５号塚　礫混層除去状況（南西から）

写真図版１８
　紙漉２５号塚　土器埋納遺構検出状況
　紙漉２５号塚　土器埋納遺構石蓋検出状況
　紙漉２５号塚　土器埋納遺構土器蓋検出状況
　紙漉２５号塚　土器埋納遺構　内部の銭・釘
　　（簡易クリーニング済状況）

写真図版１９
　紙漉２５号塚　南北断面（南西から）
　紙漉２５号塚　東西断面（南西から）

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

高松市は、行政的な区分では香川県の県庁所在地であり、面積約３７５ｋ㎡の市域に約４２万人もの人々が暮らす、四国地方有数の都市である。阿讃山脈から瀬戸内海にまで及ぶ広大な市域を有し、北は備讃瀬戸で岡山県と、南は阿讃山脈で徳島県とそれぞれ境を接している。香川県の地形を概観すると、標高１０００ｍ級の阿讃山脈の北側に、標高３００～６００ｍの前山丘陵山地が広がり、その北端には北流する河川によって台地が形成される。さらにその北側には河川によって扇状地の沖積平野が形成され、先端では三角州を形成し瀬戸内海へ注ぐ。平野の各所には小規模な山地が点在する。

飯田西１３号塚ほかの所在する高松市飯田町は、沖積平野である高松平野の西部に位置する。周辺の標高は１０ｍ程度で、香東川、本津川という２本の北流する河川に挟まれた微高地上に位置する。より微視的には、西側の本津川の形成した自然堤防と扇状地の境界付近にあたり、西側に向かっては急傾斜で降るが、東側に向かっては緩やかに傾斜し降る。こうした地形の境界にあたるため、調査中の周辺住民からの聞き取りによると、調査地から西側では現地表から浅い地点で礫層にあたるが、少し東へ外れると粘土層が厚く堆積するとのことである。前者は自然堤防の形成時に河川が運搬した円礫にあたり、後者は扇状地性の平地の堆積層に対応するものと考えられ、地形の理解と整合的である。調査した塚は多量に円礫を集積することでその外形を形成していた。こうした石材は、上記の地形的特性から近隣で多産する石材と考えられる。現在調査地周辺は田園地帯の名残を強く留めているが、近年幹線道路の開通や宅地化が進んでおり、本遺跡も宅地造成工事に伴い記録保存した。

紙漉２５号塚の所在する檀紙町は、飯田町の南にあたり、周辺河川との関係は類似し、やや標高が高い。調査地周辺は河川堤防から一段下った平坦地にあたり、周辺には田園が広がる。

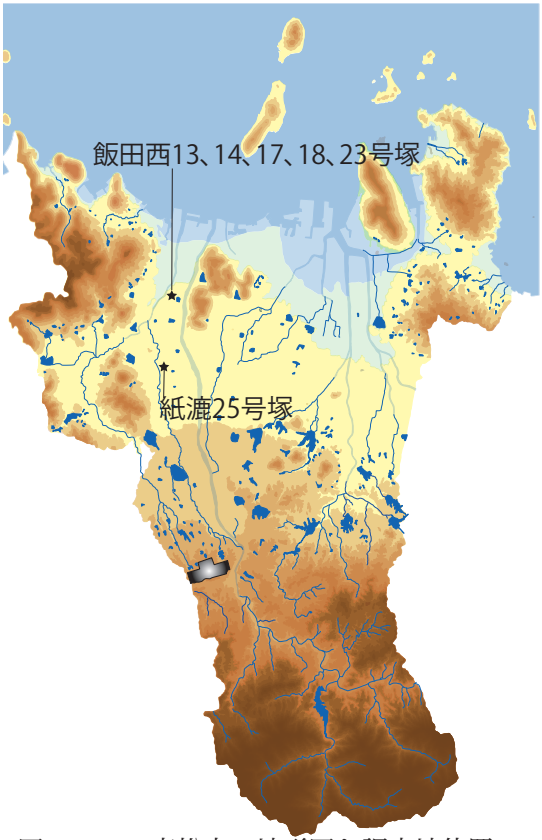


図１－１　高松市の地形図と調査地位置

第２節　歴史的環境

高松平野西部の通時的な歴史的環境は、別の機会にまとめているため参照いただきたい。（高松市教委ほか 2017）。本節では、主たる調査対象であった飯田町周辺における中世から近世にかけての歴史的環境について整理する。

まず発掘調査成果を概観する。周辺で遺構形成が顕著に見られるのは、１３世紀～１４世紀にかけてである。西打遺跡では先行して１１世紀後半～１２世紀前半に区画溝を伴う屋敷地が形成され、一時断絶したのちに１３世紀末～１４世紀初頭に屋敷地が再度形成される。築城城跡では、同時期

の溝による方形区画の他、十一面観音念持仏や輸入銅銭・輸入陶磁器を検出している。城館の構造等未解明の部分が多いが、築城城跡に関係する遺構・遺物として理解されている。鬼無藤井遺跡でも同時期に遺構形成が顕著になることが認められる。香西南西打遺跡では中世の区画施設を伴う屋敷地が確認されており、１１世紀後半～１２世紀前半、１３世紀後半～１４世紀前半の２時期における屋敷地の形成が確認される。相作馬塚古墳は、古墳時代中期の古墳が１４世紀に改変され、凝灰岩製の宝塔、蔵骨器等を伴う石組区画墓として再利用されたことが確認された。この後、近世後期ごろに盛土がなされ、再度塚として整備されたことが確認されている。

続いて文献資料から見た飯田周辺の記載を以下に列記する。なお、以下の整理に際しては『新香西史』を参考にしたが、当書については、編集者の序言として香西成資の『南海通記』『南海治乱記』、新居直矩の『香西記』、『香西雑記』を参照したとの記述のほか、近代に岡田唯吉の編集した『香西史』を参考にしたとの断りがある。本文中に出典が明記されている場合もあるが、出典の明らかでない箇所も認められる。出典が明示されたものについてはこれを併記し、明らかでないものについては新香西史のみを出典として挙げた。本来原典を参照すべきであるが、筆者の力量不足により二次資料の参照に多くを依って以下の整理を行ったことを明記しておく。

飯田に関する記述として古いものは、香西氏に関する記述の中に、飯田四郎資仲・飯田五郎資次の名がみえる（『蔭涼軒目録』 長享３（1489）年８月条？）（『新香西史』）。このように、飯田に関する記述は、香西氏配下の武将としての飯田氏、中飯田氏などに関する記述がまとまって認められる。一部を列記すると、

永正５（1509）年８月、香西元定が三谷城攻めした際の家臣に飯田右衛門督、下飯田の築城縫殿助の名が見られる（『新香西史』）。なお、『南海通記』には、「香西氏囲山田郡三谷城記」の中に、香西氏が山田郡を攻める際に飯田の飯田右衛門督、中飯田備中、下飯田築城縫殿助の名がみえる。

天正１０（1583）年８月、長曾我部軍の香西攻め。香西方として、飯田右衛門督、中飯田備中守、下飯田築城左衛門尉。伊勢馬場の戦い（佐料城の北）。（『新香西史』）

天正１３（1586）年、秀吉の四国攻めに際して、長曾我部勢が藤尾城に集結する。すでに香西氏は長曾我部に下っており、その中に飯田右衛門督の名がある。中飯田備中守は、居城が平地で用心が悪いため、子女は室山城に入れる。その後西長尾城に集合する計画であったが、誤解により国吉三郎左衛門に殺害される。（『新香西史』）

なお、飯田の城に関する記述として、『南海通記』には、「天文年間（1532 ～ 1555）の阿波讃岐兵将居城記」において、香西氏下の城として、「飯田３か所」とある。同文中で地名の他に箇所数が記載されているのは飯田だけであり、同一地区で３か所の城郭を構えたことがわかる。なお、氏名は記載されていない。

また、塚の形成に関して興味深い記述が『南海治乱記』に認められる。曰く、三好長治が勝賀城を攻めた際（天正２（1575）年）、香西氏方の渡辺一阿弥が打ち取った敵の首を弔うため、勝賀山の表に「首墳」といって石を集めて墓が造られた。また、別の説として、勝賀一帯での戦いに死んだ兵が多かったので、それを供養したとの説が紹介されており、著者（香西成資）は後者が正確であろうと推論している。今回調査を行った塚との関連で興味深いが、調査の結果１４号塚は 12 ～ 13 世紀の築造で、他については近世後期以降の形成が確認されたため時期は一致しない。

豊臣家の四国攻めののち、天正 15（1588）年、飯田伝左衛門は 200 石で生駒家に召し抱え

図１－２　調査対象地周辺の埋蔵文化財包蔵地

られている（新香西史）。なお、『南海治乱記』では召し抱えられた武士の名は飯田の築城清左衛門とされている。

近世以降の飯田について、『全讃史』によると、香川郡を１２郷５０カ村とし、飯田郷は飯田村、鶴市村、郷東村の３村からなるとある。一方、『香西記』には飯田郷は飯田村・鶴市村・檀紙村･郷東村からなるとされる。また、『香西雑記』には、笠居郷、飯田郷、中間郷、川部郷、成相郷、坂田郷の６郷により香西郡がなると記される（新香西史）。石高でみると、寛永年間の香西郡の石高は 17,044 石であり、その内飯田郷は 2,024 石であったという。

《参考文献》
高松市教育委員会・㈱日進堂 2017『相作馬塚Ⅱ』高松市埋蔵文化財発掘調査報告第 141 集
香西成資原著、伊井春樹訳 1981『南海治乱記』原本現代訳
香西町公民館 1965『新香西史』

図１－３　調査対象地周辺の塚の位置関係

写真１－１　飯田西１５号塚（南東から）

写真１－２　１５号塚上の石造物

写真１－３　飯田西１６号塚（北東から）

写真１－４　１６号塚上の石造物

第2章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

第１項　飯田西１３～２３号塚

本事業の事業者であるアイラックホーム（株）（（株）ゆめハウスから名称変更、以下アイラックホーム（株）で統一）・（株）ロータリーハウスにより、当該地で宅地造成工事が計画され、事業者と市教委で協議を行い、平成３０年３月１日～１３日にかけて、確認調査を実施した。その結果、中世～近世の遺物・石造物が、塚を構成する集石中に多量に含まれることが判明した。これを受けて、平成３０年６月８日付けで事業者より埋蔵文化財発掘の届出が提出された。届出を県教委に進達したところ、同年６月２５日付けで事業者に対し事前の発掘調査を実施する旨の行政指導があった。その後、発掘調査の実施に向けて事業者と市教委で協議を重ね、合意が形成されたため、同年６月２９日付けで、高松市、市教委、アイラックホーム（株）、（株）ロータリーハウスの四者で「飯田町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する調査協定書を締結し、発掘調査を実施することとなった。調査面積は約６４㎡、調査期間は平成３０年６月２９日～８月３日とした。なお、整理作業を含めた全業務の完了までの期間は令和元年８月３０日までと定めた。発掘調査に係る費用及び本書作成に関する整理作業に係る費用は全てアイラックホーム（株）・（株）ロータリーハウスが負担している。

第２項　紙漉２５号塚

アイラックホーム（株）・（株）ロータリーハウスにより、当該地で宅地造成工事が計画され、事業者と市教委で協議を行い、平成３１年４月１１日に、確認調査を実施した。その結果、中世～近世の遺物と、石囲区画を確認した。これを受けて、令和元年９月１３日付けで事業者より埋蔵文化財発掘の届出が提出された。届出を県教委に進達したところ、同年９月２４日付けで事業者に対し事前の発掘調査を実施する旨の行政指導があった。その後、発掘調査の実施に向けて事業者と市教委で協議を重ね、合意が形成されたため、同年９月２６日付けで、高松市、市教委、アイラックホーム（株）、（株）ロータリーハウスの四者で第１項の協定内容を一部変更し、「飯田町及び檀紙町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する調査協定書を締結し、発掘調査を実施することとなった。調査面積は約６㎡、調査期間は令和元年９月２６日～１２月１３日までとした。なお、整理作業を含めた全業務の完了までの期間は令和２年５月２９日までと定めた。発掘調査に係る費用及び本書作成に関する整理作業に係る費用は全てアイラックホーム（株）、（株）ロータリーハウスが負担している。

第２節　発掘調査の経過

調査の経過を示すため、調査日誌抄を以下にまとめる。

第１項　飯田西１３～２３号塚

7月9日　機材搬入。13・14号塚の掘削を開始する。

7月12日　14号塚の上部集石を撤去し、石造物の面的な検出を始める。

7月13日　14号塚で石囲区画を検出。複数の石造物を検出し、五輪塔が倒壊した状況であると把握する。

7月18日　14号塚の記録作業後。

7月20日　18号塚掘削開始。

7月23日　17号塚掘削開始。

7月25日　14号塚完掘。23号塚掘削開始し、同日中に完掘。

7月26日　13号塚、17号塚、18号塚は、いずれも近世以降の集石により形成されたことが判明。このため、十字に設定したアゼの撤去は、工事着手時に立会うこととし、一時調査完了。撤収。

10月22日　13号塚、17号塚、18号塚の断面掘削時に工事立会を実施。同日完了。

第２項　紙漉２５号塚

12月3日　機材搬入。上面清掃と表土除去。

12月4日　土器埋納遺構を確認、完掘。盛土の掘削。

12月5日　完掘、記録、撤収。

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理は、平成31年8月に開始し、令和2年5月に完了した。工程は表2－1のとおりである。

表２－１　整理作業工程表

工程		平成30年度								平成31年度（令和元年度）													
		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
飯田西13～23号塚	洗浄	■						■															
	接合							■	■														
	選別							■															
	写真撮影										■												
	実測								■		■												
	拓本								■														
	トレース								■														
	レイアウト								■														
	執筆編集											■	■	■									
紙漉25号塚	洗浄																	■					
	接合																	■					
	選別																	■					
	写真撮影																	■					
	実測																					■	
	拓本																					■	
	トレース																					■	
	レイアウト																					■	
	執筆編集																						■

第3章　調査成果

第１節　調査と記録の方法

まず、墳丘表面には草木類の植栽が行われていたことから、これを除去するとともに、現代のゴミや廃棄物などの撤去を行い、表面を全面に露出させた。墳丘上の障害物を除去したのち、大型の13号塚、14号塚及び紙漉25号塚については十字に断面観察用アゼを設定し、小型の23号塚と既存のコンクリート畦畔の設置時に削平されたと考えられる17号塚、18号塚については塚の長軸に沿って半裁し、断面観察を行いながら調査を進めた。なお、記録に当たっては、宅地造成工事において既設の基準点を用いた。基準点の等級は不明である。名称と座標は、飯田西13～23号塚において、東から基準点127（X=146670.028、Y=46077.988）、基準点434（X ＝ 146680.759、Y=45962.170、Z=9.995）基準点812（X ＝ 146737.448、Y=45968.150）である。このうち基準点434、812は図３－３中に位置を示した。標高は全て基準点434を基準に測量した。紙漉25号塚では、基準点6（X ＝ 145057.276、Y=46038.478、Z=21.30）、基準点14（X ＝ 145010.197、Y=46066.233）基準点15（X ＝ 145050.497、Y=46072.596）である（図３－17）。標高は全て基準点6を基準に測量した。記録に際しては、全て手測りで実測した。また、写真撮影に際しては、飯田西13～23号塚では35mmフィルムカメラでモノクロ・カラーリバーサルを撮影している他、デジタルカメラを用いて撮影した。紙漉25号塚では、カメラフイルムの入手困難にともない、デジタルカメラでの記録のみとする代わりに、コンパクトデジカメとデジタル1眼カメラを用い、主要な写真は紙に印刷したうえで保管するハイブリッド保存の手法を採用した。なお、こうした手法は平成31年度から導入している。取得した記録類は全て高松市教育委員会で保管している。

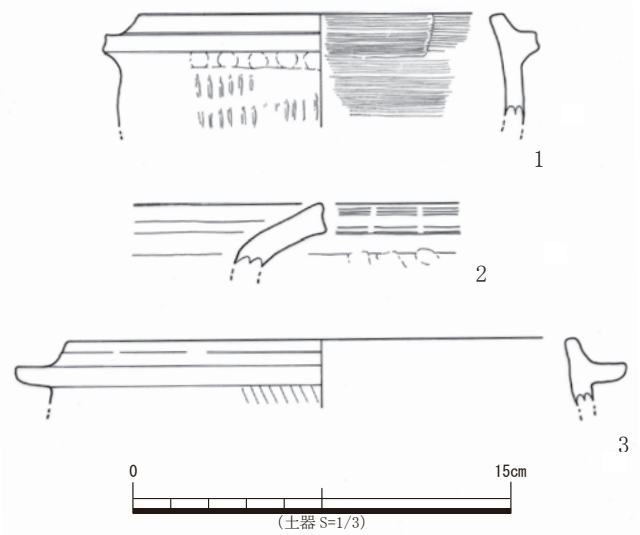


図３－１　試掘トレンチ出土遺物

第２節　飯田西１３～２３号塚の調査

第１項　確認調査の成果

事前の確認調査に当っては、塚の形状改変の可能性を考慮して、現在地表に露出する塚の周囲にトレンチを配置した（図３－３、1トレンチ～12トレンチ）。結果的に塚の範囲が現況よりも広がることは無かったが、基盤層との関係等について有益な情報を得ることが

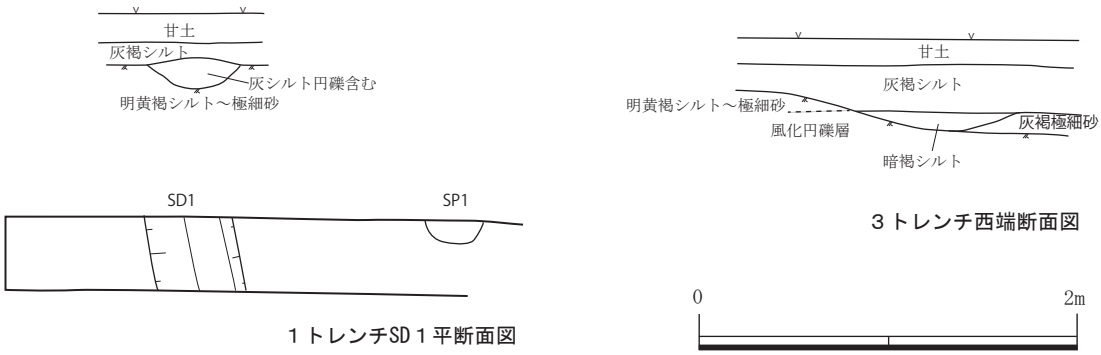
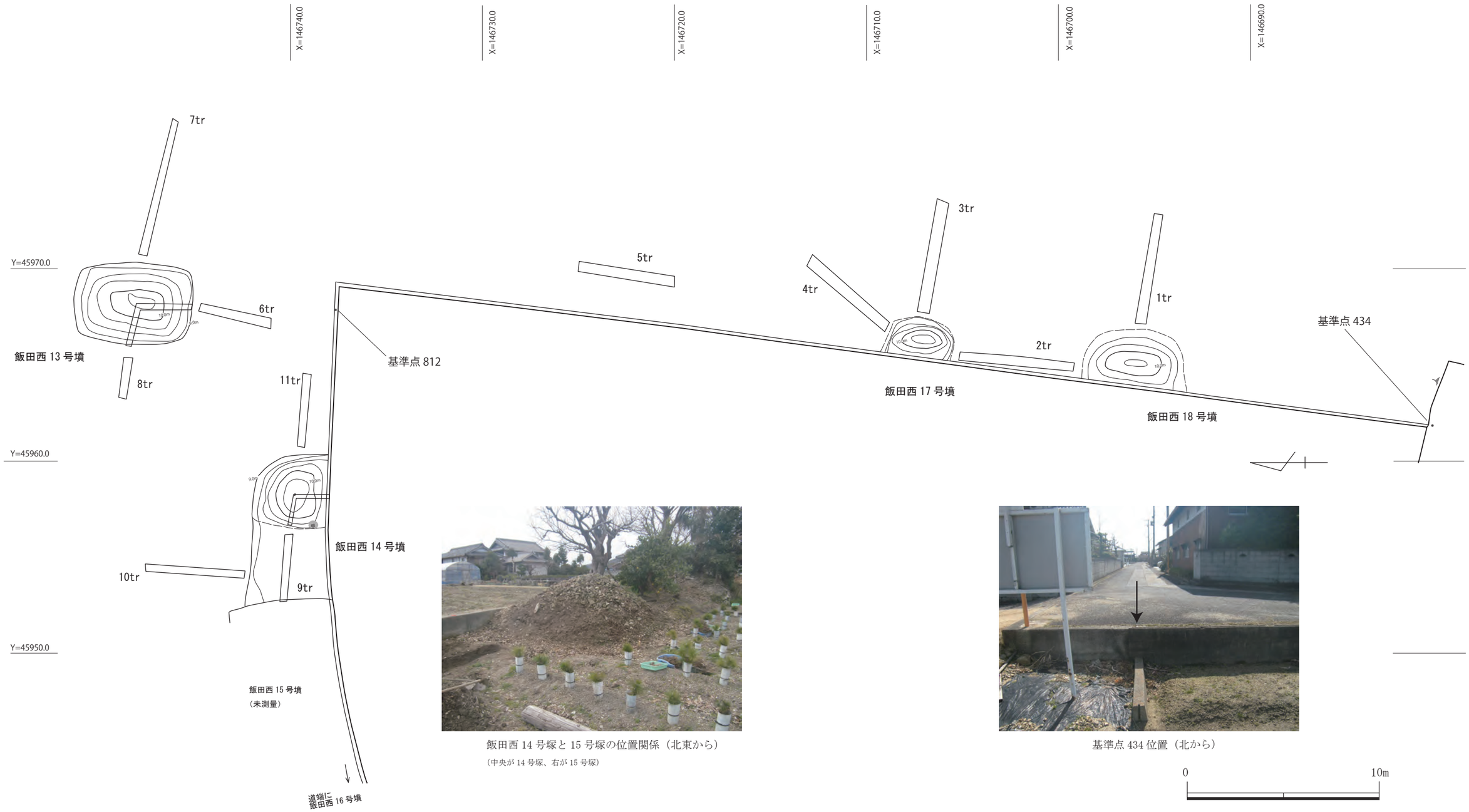


図３－２　試掘トレンチ平断面図抜粋



飯田西 14 号塚と 15 号塚の位置関係（北東から）

（中央が 14 号塚、右が 15 号塚）

基準点 434 位置（北から）

図３－３　１３～１８号塚　平面位置と試掘トレンチ配置

できたため、概要を整理する。

17・18号塚の東側に向かって、塚の基盤層であり、調査時に地山と判断した明黄褐色系シルト層が傾斜して降る状況を確認した（3トレンチ）。塚形成時の微地形が東側に向かってやや低かったことを示すが、この一段低い地点において、溝やピット等の遺構を確認することができた。いずれも遺構中からの遺物が確認できなかったため、形成時期は不明であるが、重機掘削中に比較的多量の中世土器（図3－1）が出土すること、遺構埋土が近隣の調査時において中世以降の埋土としてよく見られる灰色系シルトを主体とすることから、塚の東側を中心に中世の遺跡が展開する可能性がある。今回は塚周辺の事業用地についても試掘調査の実施について事業者に任意の協力依頼を行ったが、同意を得られなかった。周辺の埋蔵文化財の包蔵状況の確認については今後の課題である。

1は3トレンチ重機掘削中の出土。土師器足釜の口縁部。佐藤分類ＡＩに分類できる。内面に明瞭なハケ目。外面はタタキが見える。2は4トレンチ重機掘削中の出土。須恵器甕の口縁部。3は5トレンチ重機掘削中の出土。土師器足釜。佐藤分類の足釜ＢＩに分類できる。

第２項　塚の位置関係

調査を実施した５基の塚のうち、１３・１４・１７・１８号塚は比較的近接しており、２３号塚のみ東側に離れている（図１－３参照）。より詳細にみると、１３・１４号塚、１７・１８号

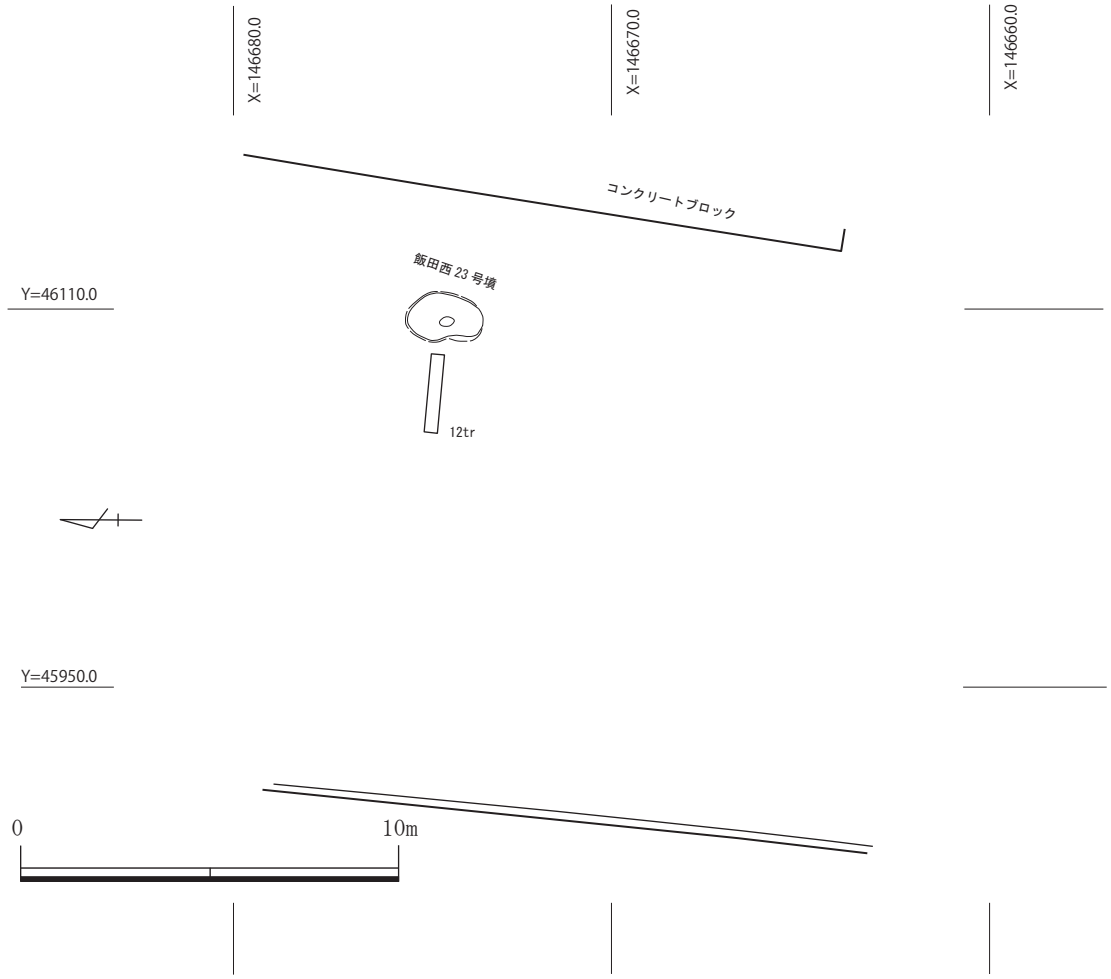


図３－４　２３号塚平面位置と試掘トレンチ配置

塚はさらに近接しており、対を形成する可能性もあるが、１４号塚の西側には図化していないが１５号塚が谷状の起伏を挟んで連接しており、単純に２基１対として整理することはできない。塚の配置の規則性については、以上のとおり単純化して整理することが困難である。

第３項　飯田西１３号塚

規模

調査前の現況で、長辺６ｍ、短辺４ｍの平面隅丸方形を呈し、高さ1.25ｍ強を測る比較的規模の大きな塚である。塚表面には、多量の砂岩円礫が乱雑に積み上げられ、樹木が繁茂していた。頂部の平坦面は狭く傾斜も急峻であり、上面に石造物を設置した痕跡は認められない。調査にあたっては、十字の断面観察用畦を設定して掘削を行った。調査の結果、平坦な地山上に礫を積み上げて塚が形成されたことが判明した。また、塚の積み上げに際して、地山の直上に間層を挟まずに礫が積み上げられていることから、塚の形成に際して旧地表が削平されるなど整地がなされた可能性も考えられる。

塚の形成過程

塚の基部は、平坦な風化礫層（図３－５、４層）が広がり、これが基底となる。上部に多量の石材を積み上げており、空隙には極細砂が疎に認められる。意図的な盛土の施工は認められず、石材の空隙に偶発的に土砂を噛んだ状況である。混和土砂の色調と、石材の粒径の大小によって２・３層に分層したが、基本的には同質の堆積であり、明確な間層も挟まないことから、同様の行為によって連続的に形成された塚の可能性が高い。２層中からは五輪塔（Ｓ１～Ｓ４）が確認された。この五輪塔が１３号塚上に設置されたものであった場合、堆積状況から３層の集石で一度塚が形成され、塚上に五輪塔が設置され、倒壊した後に２層が集積されたと考えることも可能である。この場合には、上記の想定とは異なり、段階的な塚の整備が推測される。出土遺物を見ても、それほど大きな時期差を想定しがたいことから、２層中の石造物は、塚の形成時にどこかから混入したものと考えられる。礫が主体の堆積であり、微細な分層線の設定が困難であることからも、上記いずれの想定が正しいかを確定する手段は無い。

使用石材

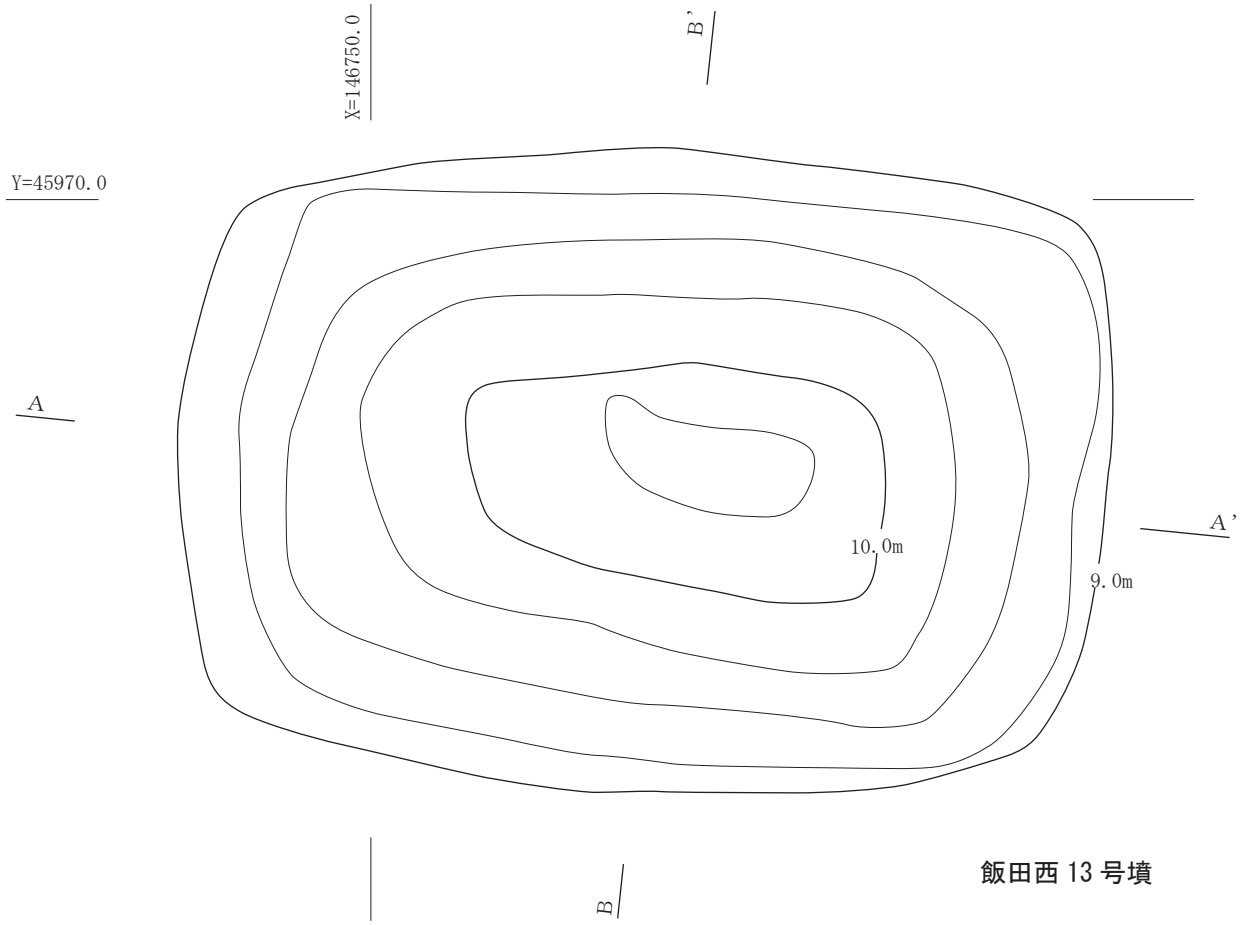
地山に含まれる礫は基本的に風化して明黄褐色を呈する砂岩礫からなるが、塚に用いられた石材にはこうした風化礫はほとんど認められない。塚を主体的に構成するのは、風化の進行が顕著でない砂岩円礫が中心で、中に安山岩の鋭利に割れたものが客体的に認められる。このため、塚の形成にあたっては、同一地点で地山を深く掘り下げて石材を採取したのではなく、より風化の進んでいない礫を周辺から集積したものと考えられる。おそらく、耕作等の掘削時に耕土中に混入する石材等が供給源となったのではないだろうか。

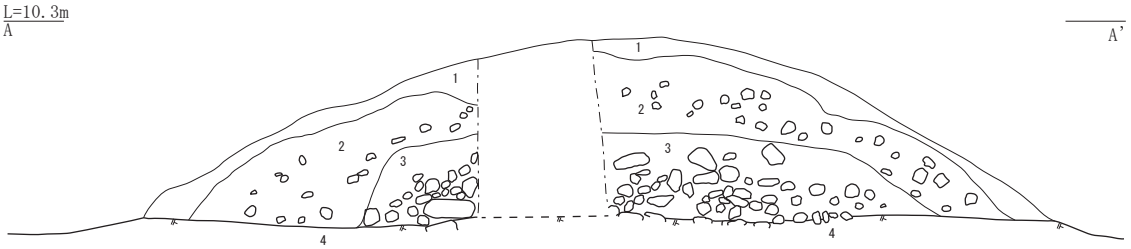
遺物

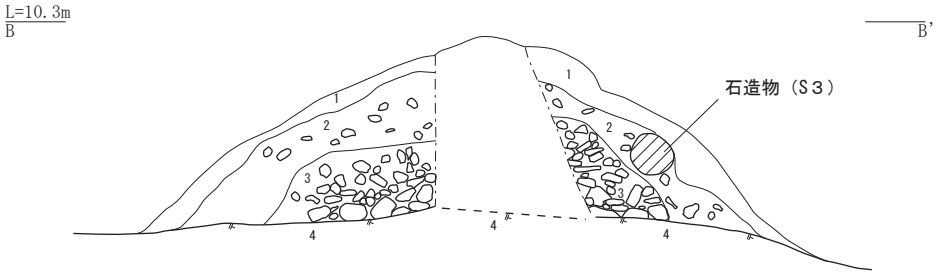
出土遺物の総量としては、近世以降の陶磁器類が大量で、中世以前の遺物は客体的である。ただし、遺物の抽出に当たっては、中世以前の遺物を中心に行い、近世以降の遺物は年代推定が可能なもの及び塚の性格の把握のために必要と判断した特徴的な遺物を限定して図化した。このため、図示した資料は出土遺物の量的な傾向を示すものではない。

４は１層、５・６は１～２層、７・８、Ｓ１～４は２層、９～１１は３層出土。

４は土師器足釜の口縁部。口縁部端部も厚く断面方形で、鍔部は厚く、断面方形を呈す。鍔部







1. 表土　円礫・近代までの遺物多く含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐シルト　10 ㎝大の砂岩円礫 20%以上含む
3. 10YR5/2 灰黄褐シルト～細砂　10 ～ 20 ㎝大の砂岩円礫 50%含む
4. 10YR5/4 にぶい黄褐シルト　地山風化礫・砂岩円礫を少量含む　遺物なし　地山

図３－５　飯田西１３号塚平断面図

の突出はやや短い。佐藤分類の足釜ＡⅡに分類できる。１３世紀末～１４世紀前葉の時期が想定される。５は須恵器底部。杯･皿･碗か。高台のすぐ外側で体部が屈曲し立ち上がる。高台は貼付。６は陶胎染付か。内外面の染付は銅版印刷と考えられ、滲みが顕著。特に外面については、横方

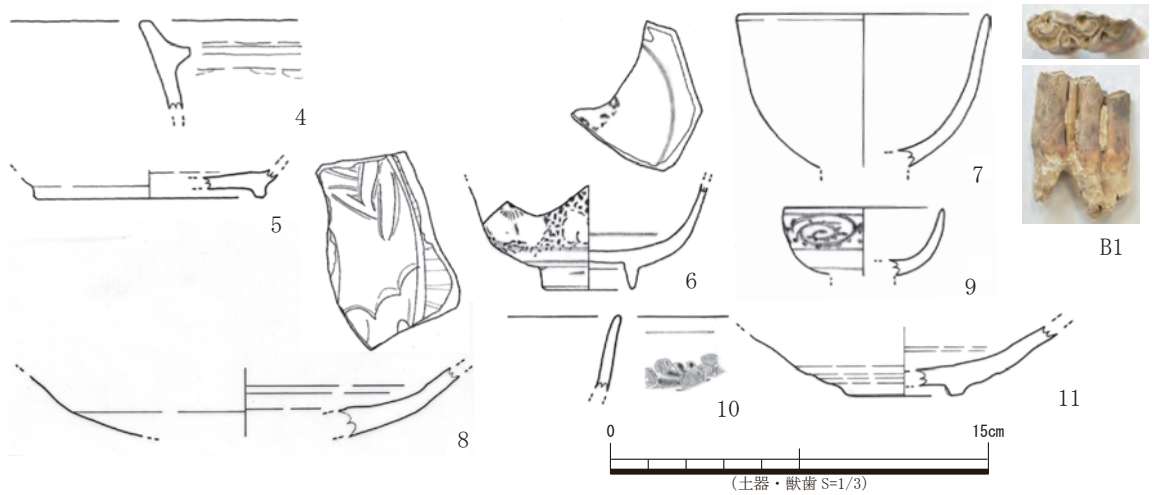


図３－６　飯田西１３号塚出土遺物

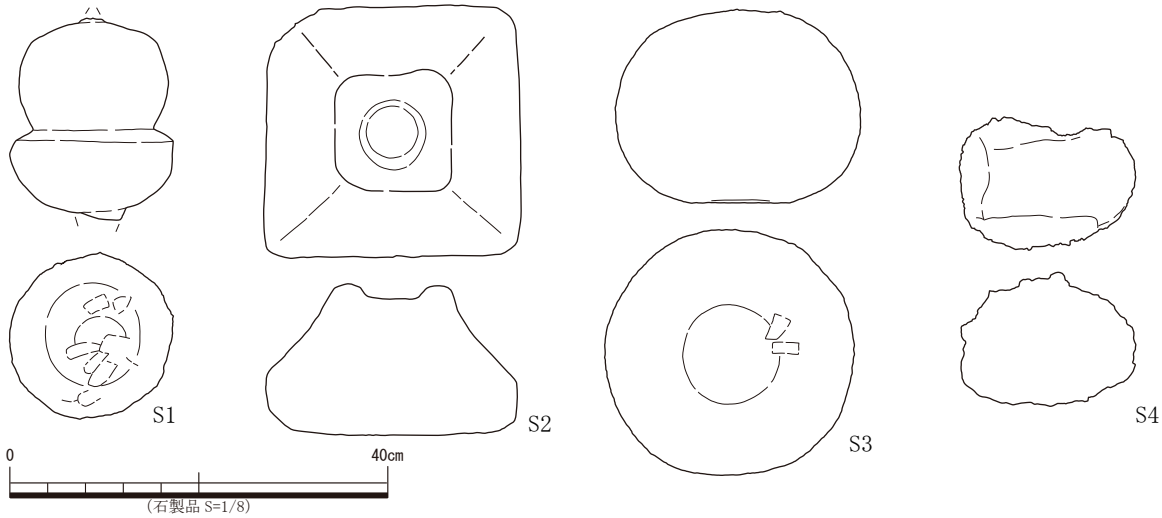


図３－７　飯田西１３号塚出土石造物

写真３－１　１３号塚出土石造物

写真３－２　１３号塚東西断面東壁　石造物出土状況（南から）

向の直線３本が先行して手で描かれたのちに、銅版を用いた染付がなされる。７は肥前系陶器の呉器手碗。丸碗。８は肥前系陶器か。青磁皿。遺存状況は良好でないが、内面上半は削出の蓮弁か。下半は不明。９は肥前系磁器小杯。外面に染付の唐草文。10 は京焼系磁器の端反碗か。赤色＋黄色の花弁、葉の色調は不明。11 は肥前系陶器碗。底面内部に砂目積みの痕跡。高台は削り出し。B1 は獣歯。ウマかウシの臼歯と考えられる。表面にやや黒ずみが見られるが、被熱の痕跡かどうか判別できない。また、獣骨はこれ以外にみられない。Ｓ１は凝灰岩製の五輪塔の空風輪。一石造り。Ｓ２は凝灰岩製の五輪塔の火輪。Ｓ３は凝灰岩製五輪塔の水輪。Ｓ４は凝灰岩製の不明石造物。Ｓ１～３は、肉眼観察による限りほぼ同質の石材で、細粒が緻密に含む。松田朝由氏（大川広域行政組合）の御教示によると、天霧産凝灰岩である。Ｓ４は外観が１～３とは大きく異なり、同じく松田氏によると国分寺町周辺で産出する凝灰岩である。Ｓ１～Ｓ３は同程度の五輪塔の組み合わせとして違和感のない法量である（写真３－１）。本来セット関係にあった五輪塔の可能性が考えられる。五輪塔の年代観は、松田 2010 に拠ると、１石で造られ、風輪高に対して風輪幅が２倍程度であり、輪郭が曲線的に立ち上がる空風輪、軒がほとんど反らず、空風輪の軸受けが浅い火輪の特徴から、Ⅱ期（南北朝時代、14 世紀第２～４四半期）に該当する資料である。

小結

セット関係にある石造物や中世土器を多く含むことから、周辺に中世段階の塚が存在した可能性が想定できるが、１３号塚が塚の形状に整備されたのは、６を始めとして銅版印刷の磁器が多数混在することから、近代まで降る。塚の形成に際して中世の塚起源の遺物が混入したのであろう。

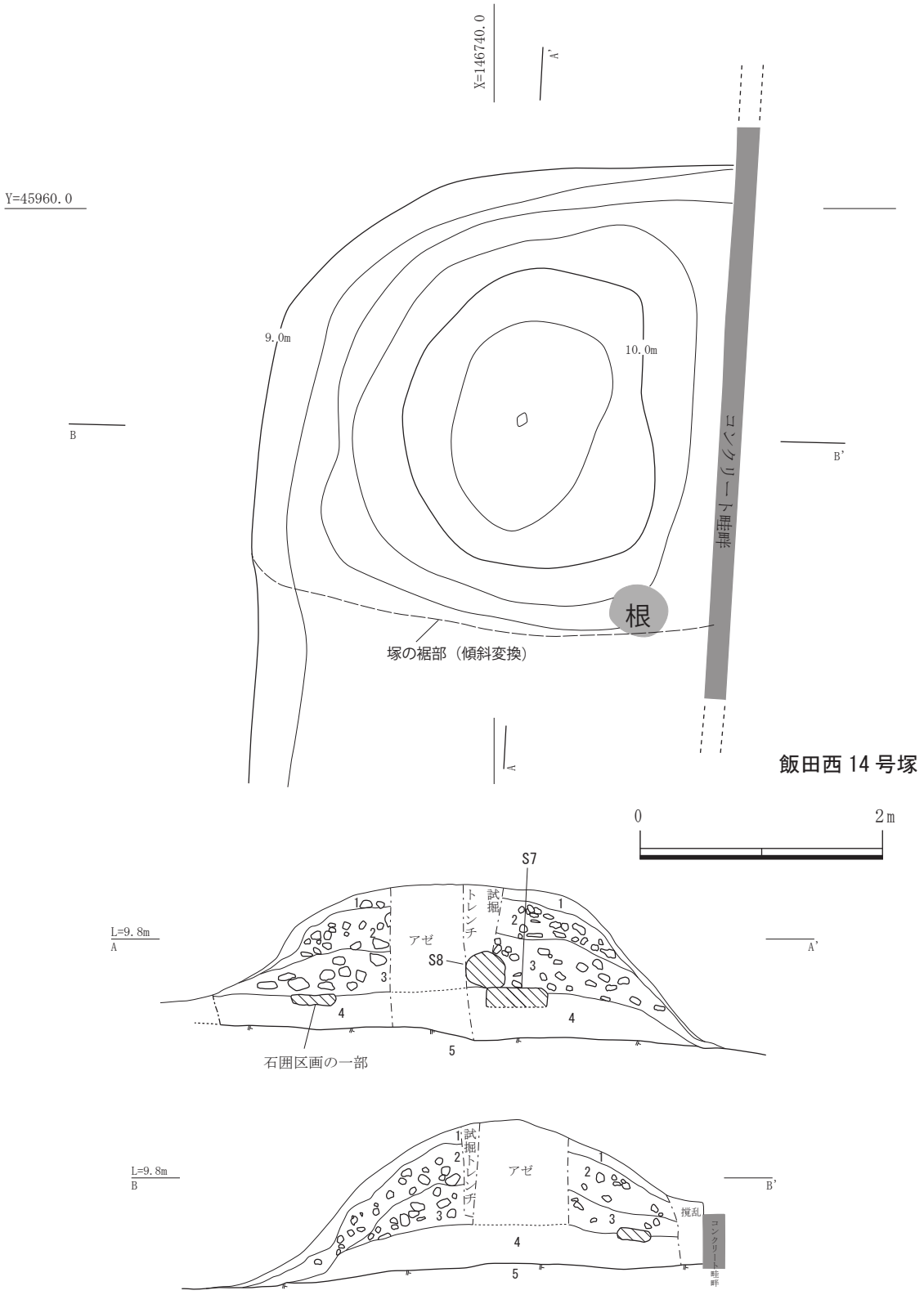
第４項　飯田西１４号塚

規模　飯田西１４号塚は、長辺４ｍ、短辺３．８ｍの円形を呈し、高さ１．３ｍ強を測る規模の大きな塚である。南辺は既設のコンクリート擁壁に切られる。もう一回り大きな１５号塚（調査対象外）と近接しており、本来一体的な塚を形成していた可能性も考えられるが、調査の結果、連続性が確認できる検出状況ではなかった。

形成過程　基盤層は１３号塚と同じく風化礫層であり、比較的平坦な地形を呈すが、西側・南側に向かって若干高くなっている。これは調査地周辺の地形の起伏と整合的である。

まず、基盤層である風化礫と風化の進んでいない砂岩円礫を多く含む黄褐シルト層を盛り上げて断面台形状の高まりを形成する。続いて、盛土を掘り下げて、後述する中央土坑が築かれる。なお、調査時には盛土である４層の中位程度の高さで平面検出した。調査時の不備により４層上面での検出が出来ず、盛土掘削中に遺構を確認した可能性も考えられるが、調査時の検出状況が正しければ盛土が２段階に分けて施工された可能性がある。すなわち、一次盛土→中央土坑→二次盛土の施工順である。調査時に盛土の断面観察を行っていたが、中央土坑の存在に気が付いたのは盛土の上面を畦を含めて掘削した段階であったため、この点については確認する手段を失ってしまった。

盛土上面の少なくとも２辺（南辺・西辺）は砂岩円礫を用いて矩形に区画される。この区画を石囲い区画と呼称し、石囲いによって区画された塚を一次墳丘と呼称する。これは、後述する石積みによる後世の塚の改変と区別するためである。続いて、一次墳丘上に五輪塔が設置される。地輪（図３－１０、Ｓ８）は検出時の上面が水平に近く、二次的に抜き取られたり移動された痕



1. 表土　砂岩円礫を多量に集積する　現代の遺物を含む
2. 10YR3/2 黒褐シルト　砂岩円礫を多く含む　近代の遺物（銅版プリントの磁器など）含む
3. 10YR4/4 褐シルト　砂岩円礫を多く含む　近代の陶磁器含む
4. 10YR5/4 にぶい黄褐シルト　地山風化礫を少量含む　砂岩円礫を 10％含む　遺物なし
5. 砂岩円礫の間隙に少量の黄褐シルトを含む　地山

図３－８　飯田西１４号塚平断面図

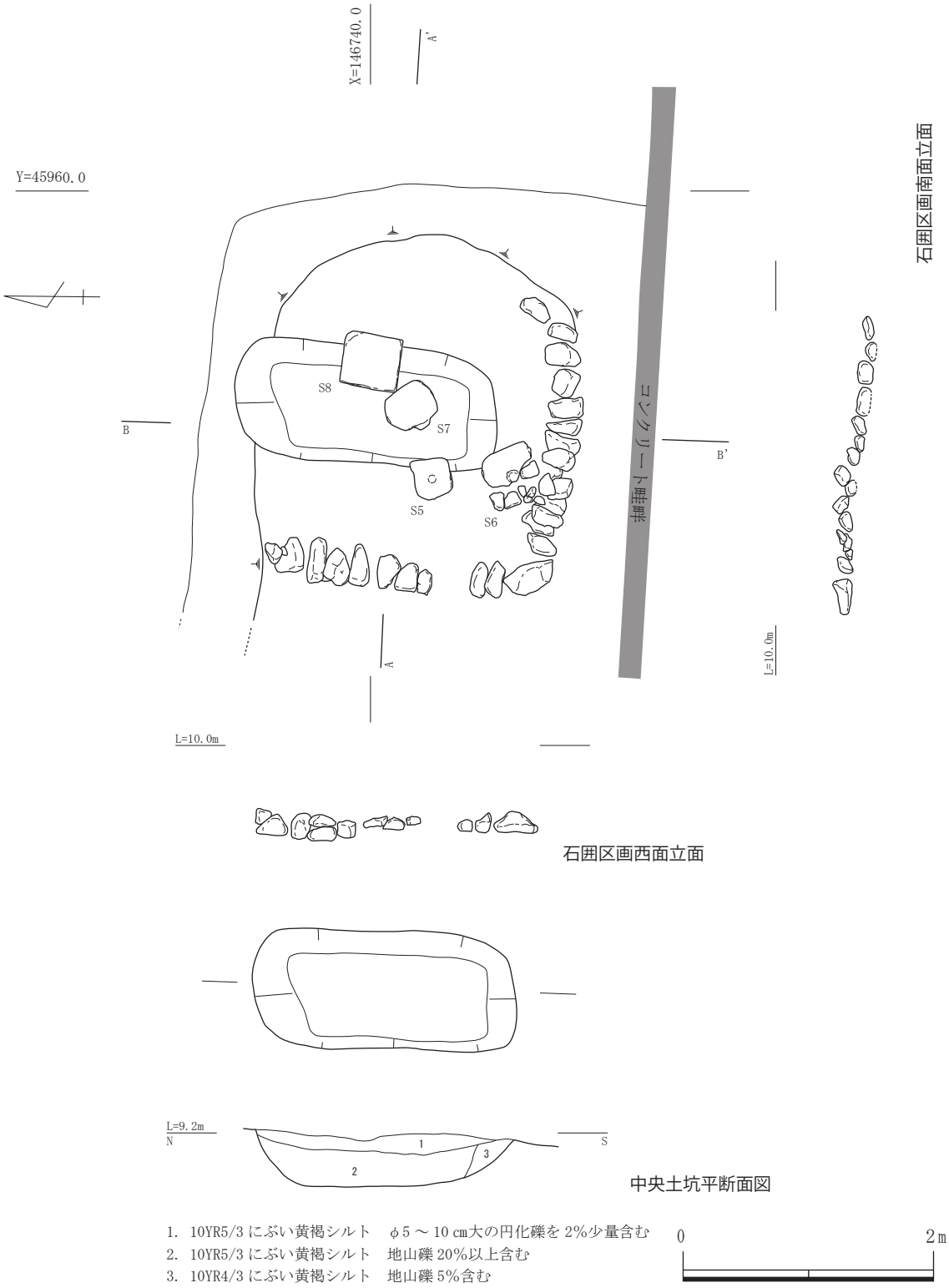


図３－９　飯田西１４号塚　石囲区画及び中央土坑平断面図

写真３－３　１４号塚東西断面（北から）

写真３－４　１４号塚　石造物検出状況①（南西から）

写真３－５　１４号塚　石造物検出状況②（北東から）

写真３－６　１４号塚　石囲い区画（南から）

写真３－７　１４号塚　中央土坑断面（北東から）

写真３－８　１４号塚　完掘状況　奥は１５号塚（東から）

跡が確認されないことから、原位置を保っているものと考えられる。断面観察では、設置のための掘方は認められず、下半が盛土中に埋没していたことから、盛土の施工と同時に地輪が設置されたものと考えられる。この想定を採用すると、盛土施工と五輪塔の設置が同時に行われたと考えられる。以上を整理すると、盛土→中央土坑の掘削、埋没→（盛土施工？）→石囲い区画施工、五輪塔設置という形成過程が想定できる。

五輪塔の周辺には二次的に移動した五輪塔の水輪１点、火輪２点が南西方向に広がっている。五輪塔が倒壊した状態と評価することも可能であるが、この際火輪が１つ多い点には注意が必要である。堆積状況を見ると、Ｓ５は盛土の直上ではなく、３層の中位から検出しており、二次的に移動した可能性が考えられる。このため、Ｓ６～８が同一の五輪塔で、これが倒壊した状況で

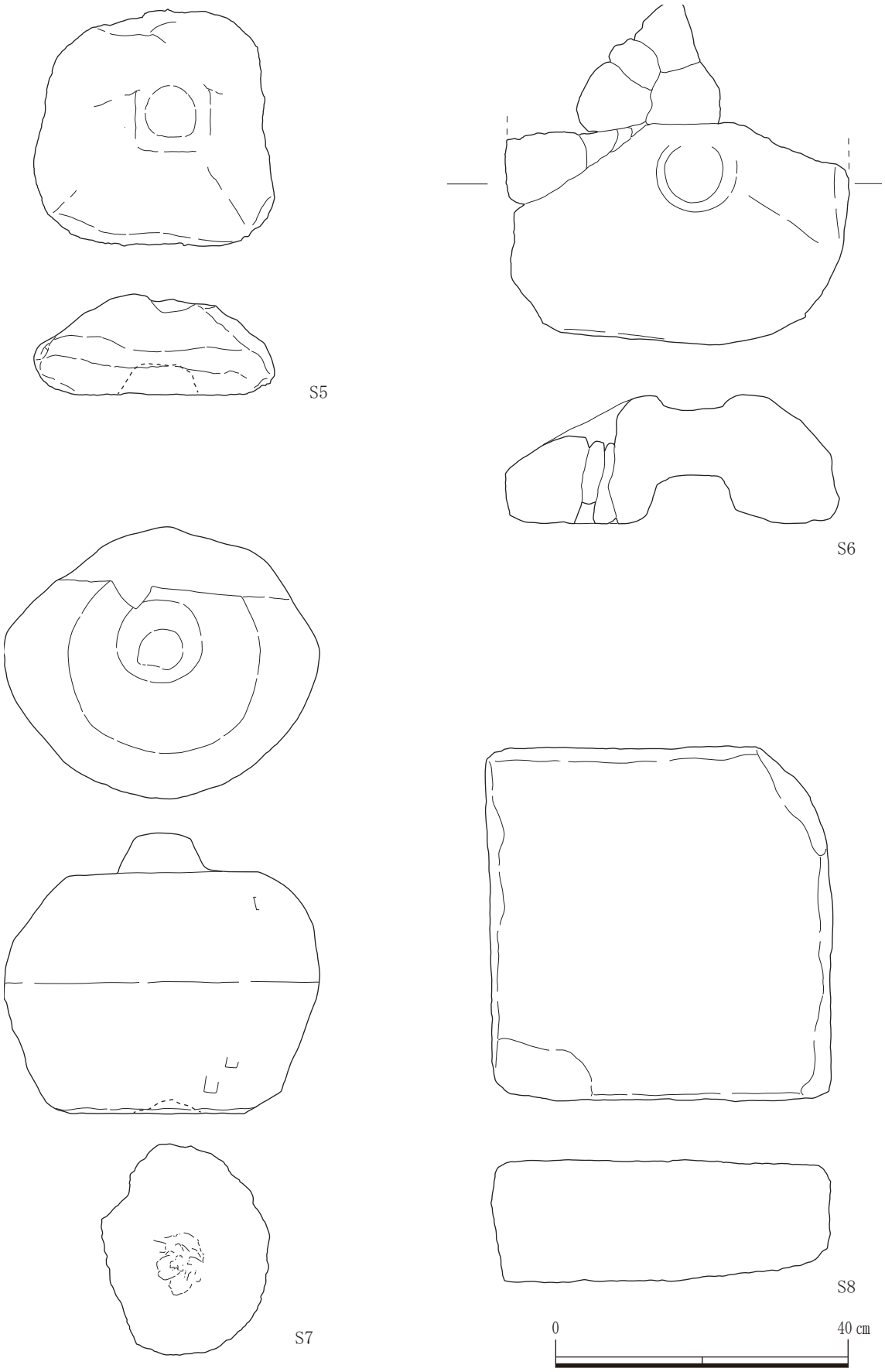


図３－10　飯田西１４号塚出土石造物

あると考えられる。なお、空輪・風輪は確認できなかった。

五輪塔の倒壊後、他の塚と同様に砂岩円礫を主体とし、空隙に植壌土が混入した土砂が高く積み上げられた。これを二次墳丘と呼ぶ。

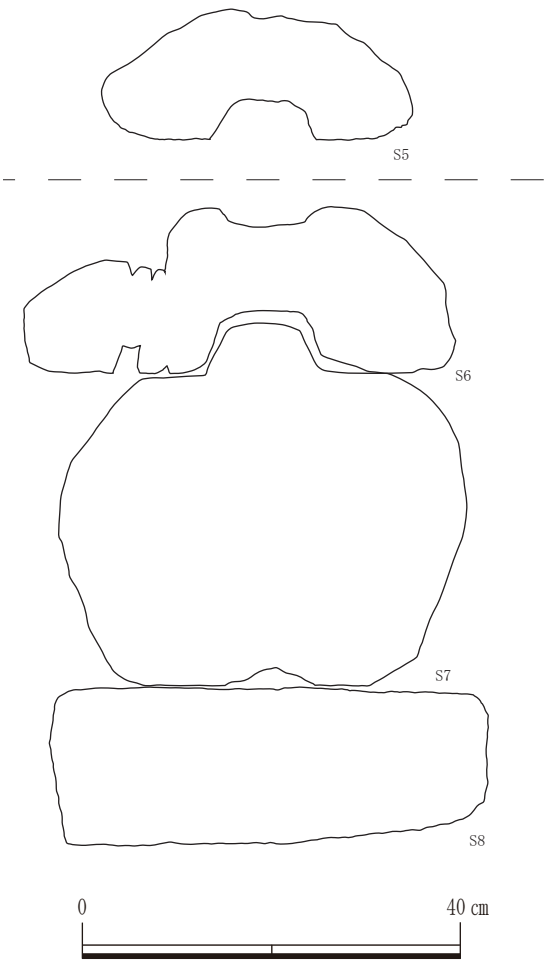


図３－１１　飯田西１４号塚出土石造物断面重ね図

中央土坑

盛土を基盤層として形成された土坑で、長辺２．１ｍ、短辺０．９ｍの平面形は隅丸長方形である。長軸は概ね南北方向を向く。墓壙の可能性を想定して慎重に掘削を行ったが、遺物等は皆無であった。また、埋土は比較的均質な地山風化礫混じりのシルトであり、炭や骨片等も確認できなかった。このため、形成時期は一次墳丘の形成に先行することは判明するものの、いつ形成されたのか、またその機能を直接特定することはできない。五輪塔との位置関係をみると、中央土坑の中央東よりの直上に五輪塔が配置されたことが分かるため、相互の位置関係が意識的に関連付けて配置された可能性は高いと考えられる。なお埋土の土壌サンプルは採取していない。

石囲い区画と１次墳丘

砂岩円礫を用いた石囲区画は、検出長で東西２．２ｍ、南北２．３ｍである。直角に曲がる南西隅を検出しており、東端、北端は既に削平された可能性が高い。南辺の東端では、隅部を形成する可能性のある石材を１石確認している。この場合、石囲の東西幅は２．３ｍで確定することになり、平面正方形の石囲い区画であったことになるが、小型石材がやや浮いたような状態であり（写真３－６右端）、二次的に移動している可能性も考えられるため確定はできない。

石積みの技法をみると、いずれも石材の小口面を外側に向けて揃えて並べている。隅角部は一回り大きな石材を斜めに配置することで、平面隅丸方形を呈する。垂直方向に２石以上を積み重ねる箇所はほとんどないことから、石積みの高さは検出状況が本来の高さに近似するものと考えられる。なお、塚上面に残る地輪の根石下面のレベルは９．２ｍ、上面で９．４ｍ、石囲区画の上面は９．３～９．４ｍであり、ほぼ同一の高さである。石囲区画は、平面的な空間の区画の他に、盛土の流出防止という機能的な役割も果たしたものと考えられ、１次墳丘が地山からの高さ約０．３～０．４ｍの規模であったことが分かる。この比較的低平な塚の上面に五輪塔が設置されたのである。

五輪塔の設置

墳丘盛土上面の施工とともに五輪塔が設置される。倒壊した五輪塔の内、Ｓ５～Ｓ８を図上で組み合わせたものが図３－１１である。特にＳ６～８については、石質が酷似しており、形態から想定される製作年代も大きく離れていないこと、火輪と水輪の突起と受け部の法量がほぼ一致

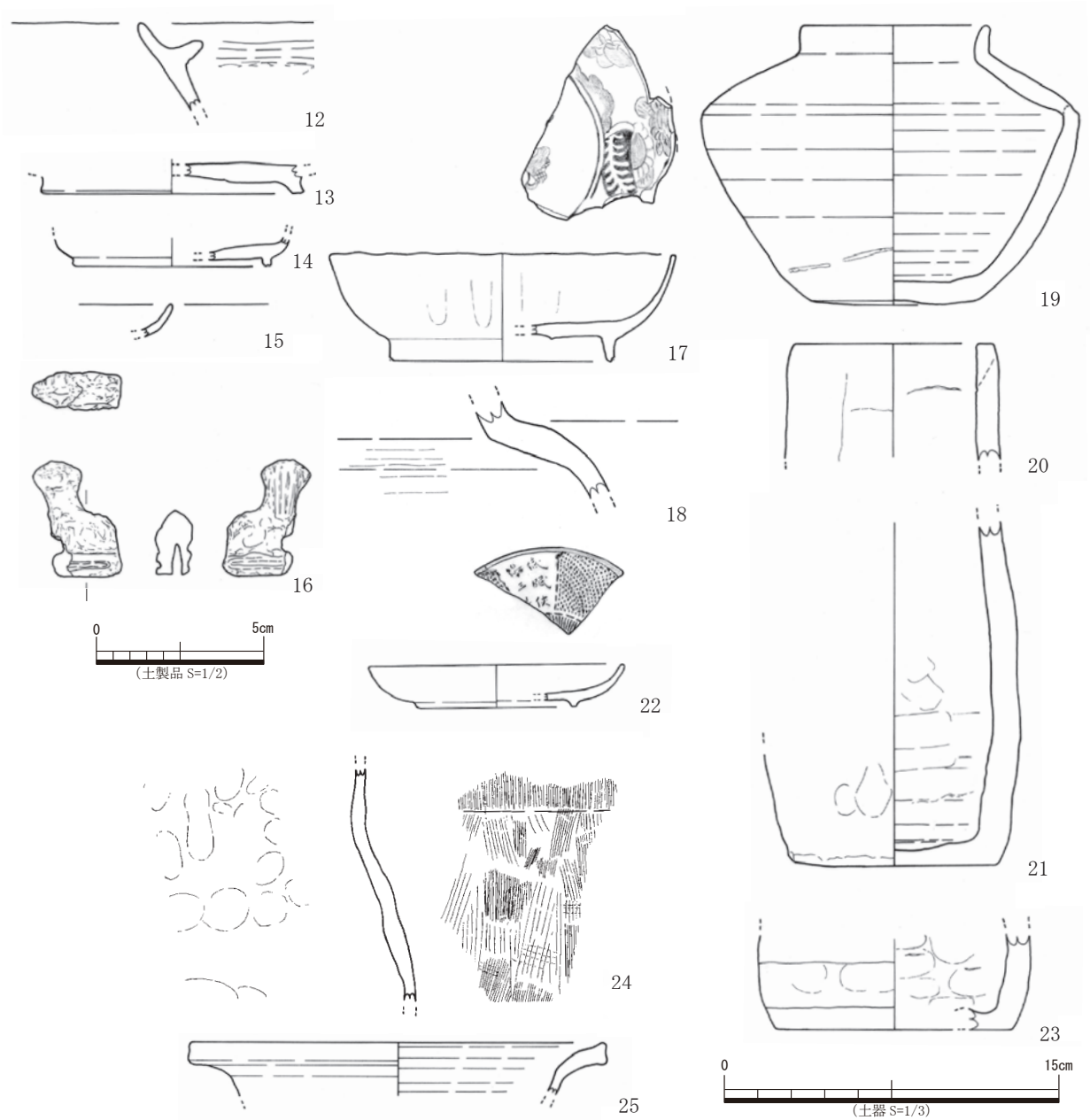


図３－12　飯田西１４号塚出土遺物

することから、本来組み合うセットであった可能性が高い。なお、Ｓ５の受け部は浅く、Ｓ７の突起部と組み合うことができないため、セット関係を想定することは困難である。なお、水輪の下面中央には窪みがあり、ここに仏具や舎利等が収められた可能性が考えられるが、該当する遺物は確認できていない。また、空風輪についても確認できていない。五輪塔が南西方向に向かって倒壊し、その上を被覆するように二次墳丘が形成される。

二次墳丘

今回調査した他の塚と同様、二次墳丘が高く積み上げられる。二次墳丘の高さは、最大で８０ｃｍ程度であり、石材の間隙に入り込んだ植壌土の土色から２層に分層したが、石材の状況からはほぼ同質な堆積であり、出土遺物もほぼ同時期の遺物を含む。後述する遺物の状況から、二次墳丘が積み上げられたのは近代以降である。

出土遺物

１３号塚と同様、出土遺物の総量としては、近世以降の陶磁器類が大量で、中世以前の遺物は客体的である。ただし、遺物の抽出に当たっては、中世以前の遺物を中心に行い、近世以降の遺物は年代推定が可能なもの及び塚の性格の把握のために必要と判断した特徴的な遺物を限定して図化した。このため、図示した資料は出土遺物の量的な傾向を示すものではない。

１２は１層、１３～１９は１～２層、２０～２２、Ｓ５～Ｓ７は３層、２３・２４は３層でも特に倒壊した石造物よりも下層からの出土。Ｓ４は１次墳丘の上面で、墳丘形成途中に設置され原位置を保つ。２４は３層でも中央土坑埋土上面からの出土。

１２は土師器足釜の口縁部。端部は丸みを帯び、鍔部は高く突出する。佐藤分類の足釜Ｂ－１に分類できる。１３は須恵器底部。底径１１．７cmとやや大型で、壺等大型器種の底部の可能性が考えられる。底部切り離しはヘラケズリだが、調整は粗雑。高台は貼り付けか。１４は須恵器底部。強く屈曲する杯か皿か。底部切り離しは不明で、高台製作技法も不明。高台の外側で体部が強く屈曲して立ち上がる。１５は土師器小皿の口縁部である。小片であり、口径の復元などは困難である。平成２８年に調査した相作馬塚古墳では、中世の石組区画墓を検出しており、その中で筒状の蔵骨器の中に小型の土師器皿を収めた設置状況を確認している（高松市教育委員会 2017）。２１との組み合わせは、そうした蔵骨器と小型皿のセット関係を示す可能性があるため、二次的に移動した資料であるが図化した。１６は土製の人形。狛犬か。正面と背面の２面の型を用いて成形される。顔と前脚付近が欠損する。大きな耳を有し、背面に長いタテガミの表現が認められる。台座の底面には、穿孔が認められる。固定用の孔であろうか。１７は京焼系磁器の皿。底部は蛇の目凹形高台。内面に赤、黄、紫、緑の上絵。明確にみられるモチーフは花弁と蝶。１８は須恵器壺の肩部。厚手で体部上半は丸みを帯びた形状。外面に自然釉。１９は須恵器短頸壺。口縁部は短く直立し、体部は上部で屈曲し明確な肩を作り出す。外面肩部及び内面の見込み付近に自然釉の付着が顕著で、自然釉の降灰後に付着した砂粒が多数付着する。自然釉の付着範囲から、焼成時にサヤ等の窯道具に収められていないこと、重ね焼きされた際に積み重ねの最上部に位置したことがわかる。体部外面の下１／３程度の範囲に重ね焼きによる他個体の付着が見られる。付着部の直径は約１２．３cmであり、この壺の口縁部径よりもかなり大きいことから、下半に重ねられた個体は異なる器種であった可能性が高い。口径から類推するに、杯や皿などであろうか。底部はおそらく削り出されたのちに入念にナデられ、丸みを帯びる。出土状況からは二次的な移動が確実であるが、ほぼ完形に近い遺存状況と、塚との関係を最大限評価するならば、蔵骨器等、特殊な用途を想定することも可能である。２０は２２と同一個体の可能性が高い。土師器の蔵骨器口縁部。端面は角張って平坦に仕上げられる。内外面ともにナデで仕上げられる。２１は土師器の蔵骨器。底部は平底で、体部は緩やかに外反しながら直立する。底面、外面は最終調整で入念に撫でられているが、表面の凹凸は顕著である。内面のナデはこれに比べると疎で、粘土接合痕が明瞭に観察できる。粘土接合痕の断面は、外側が高く内側が低い。２２は肥前系磁器皿。２３は土師器の蔵骨器。形態上の特徴は１５と類似する。底部は平底で、やや湾曲しつつ体部が直立する。内外面ともにナデで仕上げられるが、内面に比べて外面のナデが丁寧。２４は土師器広口壺の体部上半から肩部。胎土に角閃石を稠密に含む。２５は体部に続く部位の傾斜から、弥生土器の鉢か。口縁端部は上下にやや肥厚する。胎土には雲母・角閃石を密に含む。

Ｓ５は五輪塔火輪。頂部に風輪の軸部、底面に水輪の軸部を受ける窪みをそれぞれ有す。全体

に扁平な形状。Ｓ６も五輪塔火輪。Ｓ５よりもかなり大型で、多数の細片に破砕してしまっており、半分程度しか接合できなかったが、周辺の石材破片の散布状況から類推して本来完形で倒壊することで破損したものと考えられる。頂部の窪みは浅く、底面のものは深い。軒の傾斜は緩く、全体に扁平な形状を呈す。Ｓ７は五輪塔水輪。頂部に軸を、底面に浅い窪みを有する。頂部は軸部の周辺に平坦面を有す。Ｓ８は五輪塔地輪。平面正方形で、扁平で比較的断面形状が薄い。

小結　一次墳丘の形成時期を示す唯一の遺物は石造物である。Ｓ６～８の年代観は１２～１３世紀頃と考えられる。その後、二次墳丘が形成されるのは、１７や２２から、近代以降である。一方、３層でも石造物よりも下層からは中世以前の遺物しか出土しておらず、五輪塔の倒壊そのものは二次墳丘の造成に先行していた可能性が高い。

第５項　飯田西１７号塚

規模　飯田西１７号塚は、長辺３．６ｍ、短辺３ｍの平面半円形を呈し、高さ１．２５ｍ強を測る。西辺は大きく既存のコンクリート擁壁によって切られる。

形成過程　塚形成の基盤層である灰黄シルト層（図３－１３の４層）は、事前の確認調査で中世の遺構面である可能性が想定されている。また、１３・１４号塚の基盤層であった風化礫層は、５層よりも下位で確認される。１７号塚は、４層を基盤とするが、４層は東側に向かって薄くなって途切れ、５層が基盤層となる。４・５層の上に砂岩円礫を主体とした礫を多量に積み上げることで塚が形成された。なお、礫の密度や間隙にみられる稙壌土の土色から２層に分層しているが、基本的に同質な層であり、間層を挟まないことからもあまり時間差の無い形成が想定される。最終的に塚は急峻な隆起を見せていた。

遺物　遺物は全て２～３層からの出土。

２６は土師器甕の口縁部。２７は土師器足釜の口縁部。佐藤分類足釜ＡⅡに分類できる。内面にハケが明瞭。２８は土師器足釜の口縁部。佐藤分類足釜ＢＩに分類できる。２９・３０は土師器足釜の脚。３１は須恵器の大型器種体部。大甕か。外面は格子状のタタキ残る。外面に他個体付着。自然釉が掛らない範囲があり、重ね焼きや窯道具の痕跡を示すか。３２は須恵器擂鉢の口縁部。内面に擂り目７条１束１カ所。口縁部上面が肥厚する。３３は産地不明磁器皿。口錆。内面の染付は銅版刷り。

小結　墳丘の最下部付近からも近代以降の遺物（３３）が出土することから、塚が形成されたのは近代以降である。成因は不明であるが、他の塚と異なる点は石造物を伴わない点である。

写真３－９　飯田西１７号塚断面（北から）

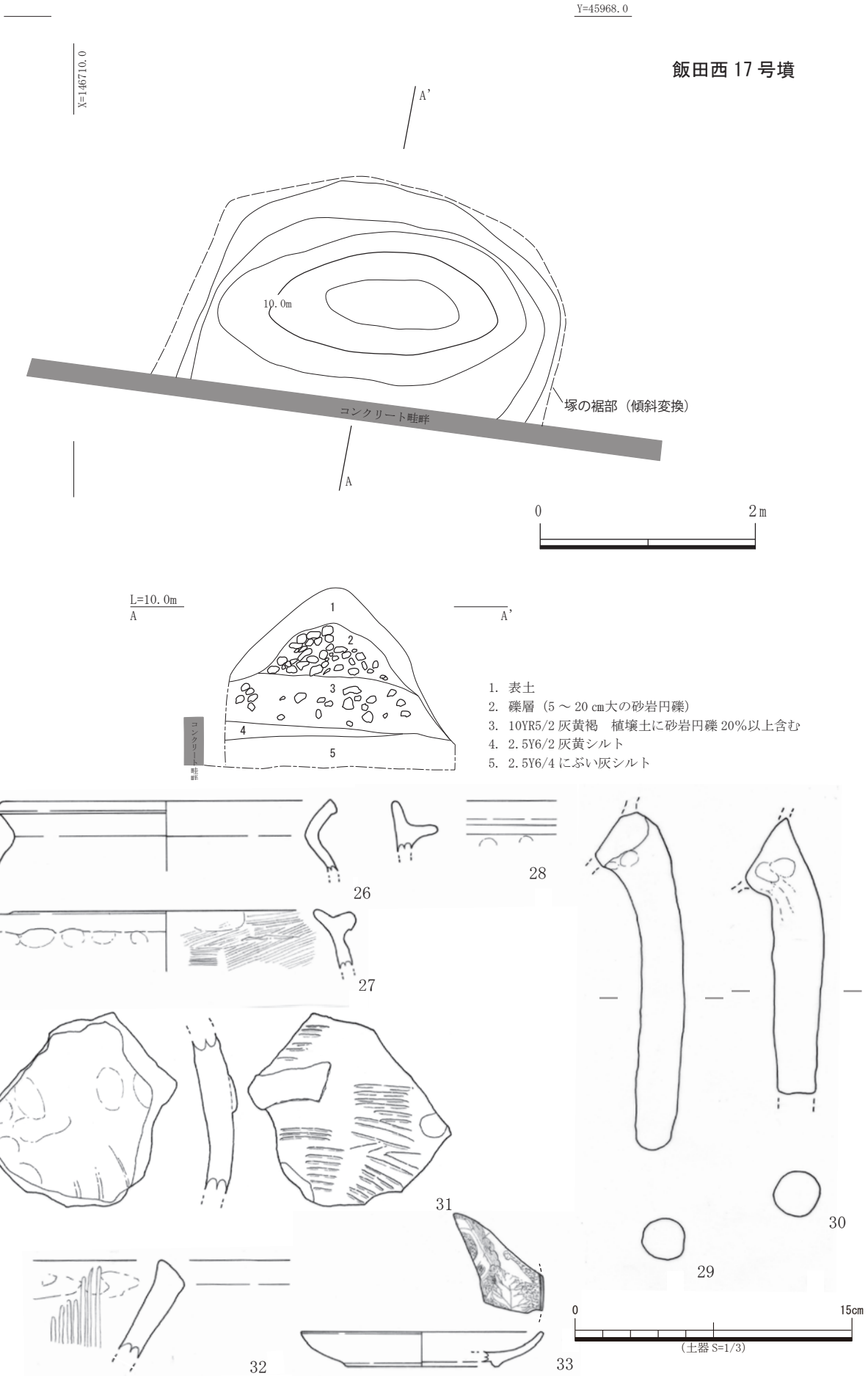


図３－13　飯田西１７号塚平断面図及び出土遺物

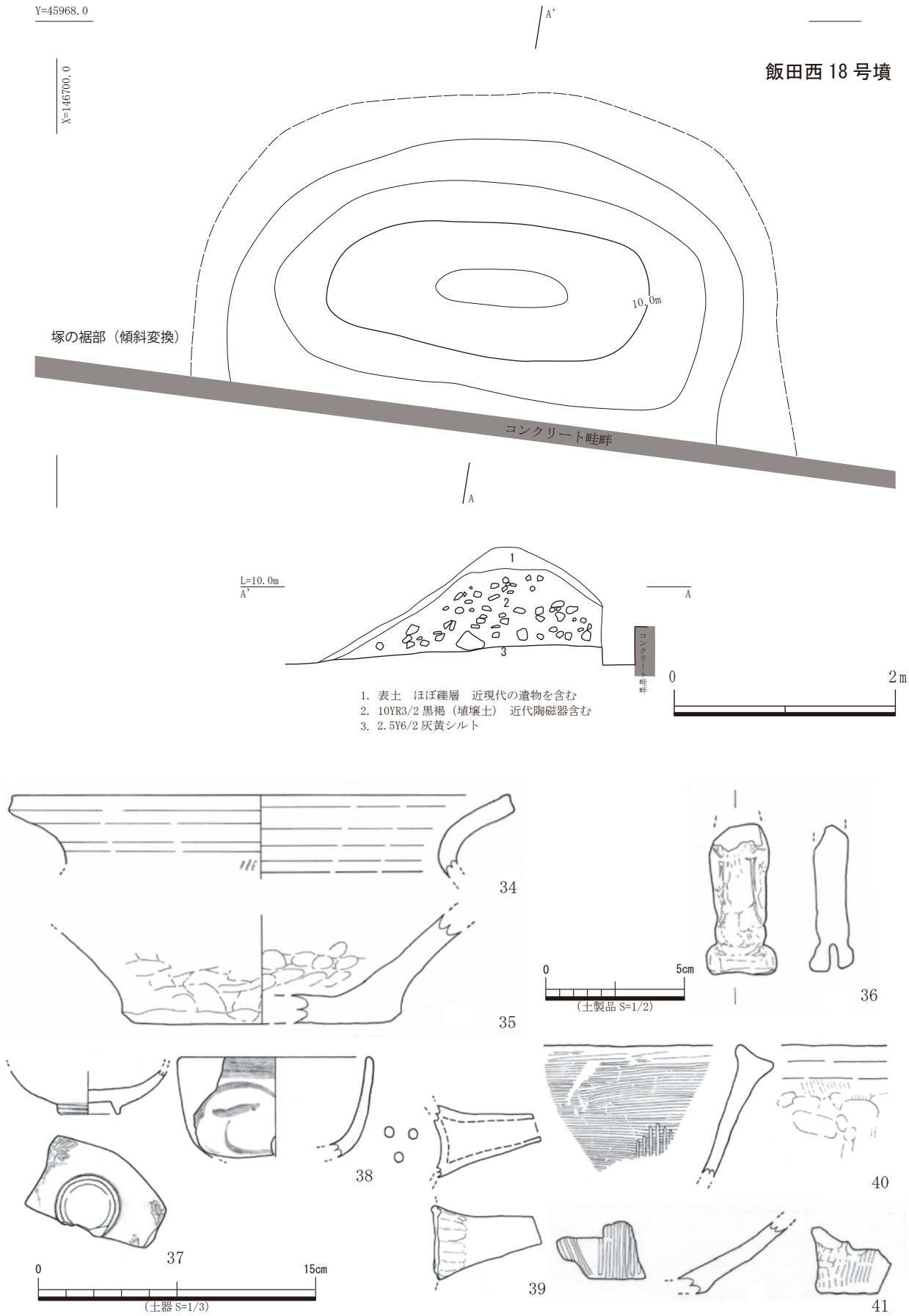


図３－１４　飯田西１８号塚平断面図及び出土遺物

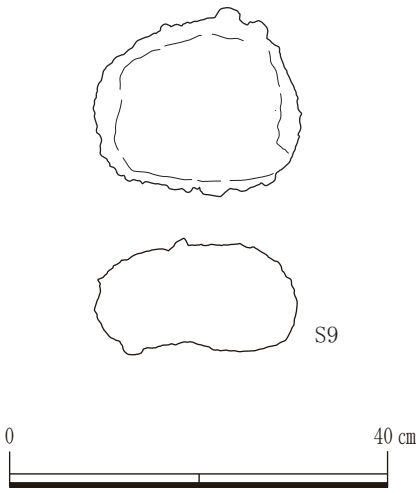


図３－１５　飯田西１８号塚出土石造物

写真３－１０　飯田西１８号塚断面（北から）

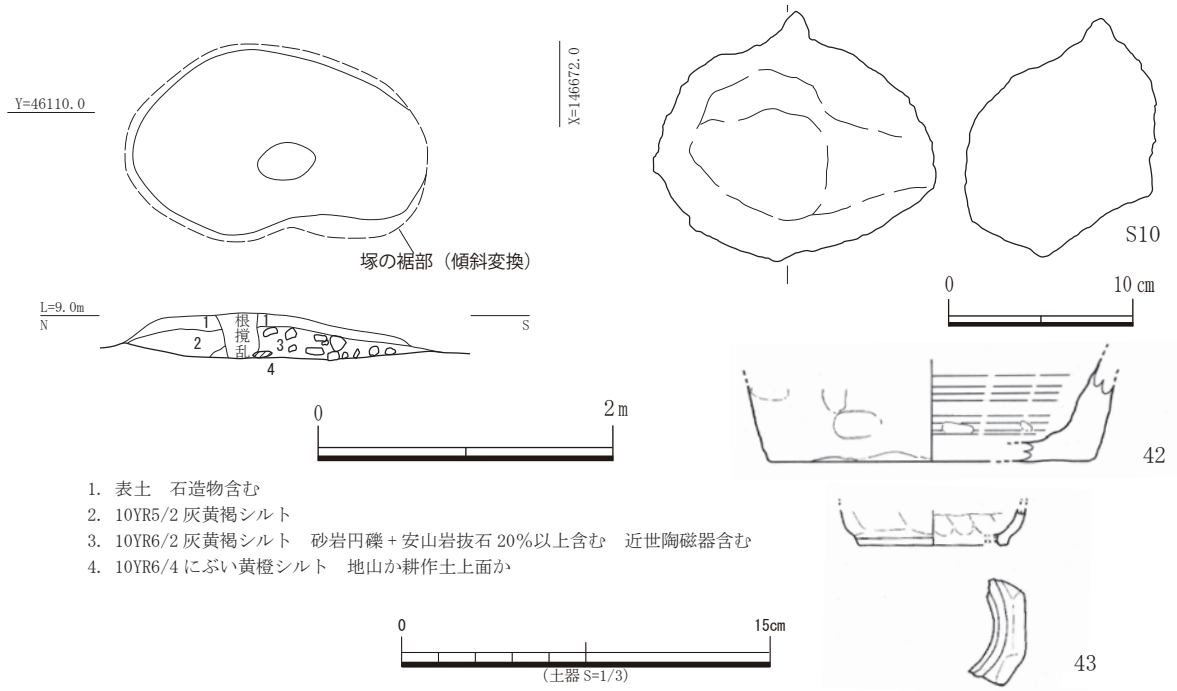


図３－１６　飯田西２３号塚平断面図及び出土遺物

第６項　飯田西１８号塚

規模　飯田西１８号塚は、長辺５．４ｍ、短辺２．６ｍの楕円形を呈し、高さ１ｍ強を測る。西辺は大きく既存のコンクリート擁壁によって切られる。

形成過程　１７号塚と同じく、灰黄シルト層を基盤層として形成される。底面付近に大ぶりな石材を認めるが、概ね５～20 ㎝大の砂岩円礫を積み上げて塚が構成される。

出土遺物　３４は表採。３５～４０、Ｓ９は

写真３－１１　飯田西２３号塚断面（西から）

２層から出土。

３４は須恵器大甕の口縁部。３５は須恵器の大型器種底部。甕か壺か。底面は未調整と思われ、不規則な凹凸が見られる。３６は土製品の人形。仏像か。右手に杖状の表現があり、左手は球形の何かを持つように見える。底面には穿孔１カ所。固定用か。３７は産地不明磁器碗底部。外面の草花と獣脚は銅版刷り。３８は陶胎染付の椀。外面に丸囲いの中心に１字。３９は軟質施釉陶器の急須。注ぎ口に３孔。４０は土師器擂鉢。内面に擂り目が６条以上１単位。口縁部が上下に拡張する。外面には粗いハケ目。色調は褐色を呈し、比較的堅緻に焼き上がり須恵器の焼製不良品には見えがたい。４１は土師器擂鉢の底部。擂り目は７条以上２単位。外面にも明確なハケ。Ｓ９は凝灰岩製石造物。松田氏の教示によると天霧産。器種は不明。

小結　２層から出土する３７等から、塚が形成されたのは近代以降である。

第７項　飯田西２３号塚

規模　飯田西２３号塚は、長辺２ｍ、短辺１．２ｍの楕円形を呈し、高さ０．２５ｍの小規模な塚である。塚の上面には凝灰岩の石造物が１点置かれており、小型であるが塚として認識されたことの痕跡として理解できる。

形成過程　均質な黄橙色シルト層を基盤層とし、砂岩円礫と安山岩板石を主体とした盛土が積み上げられる。

４２は須恵器壺の底部。底面は無調整。放射状に枝痕が２箇所残る。４３は瀬戸美濃系磁器底部。外面に多角形の屈曲を有す。６～８角形の可能性。内面に指頭圧が残り、施釉されないことから瓶等の可能性が考えられる。Ｓ 10 は凝灰岩製の石造物。松田氏の教示によると天霧産。４３から、塚の形成は近世でも様相８（1821 ～ 1872 年）以降である。

第３節　紙漉２５号塚の調査

規模

調査前の現況で、長辺４ｍ、短辺２．５ｍ＋の楕円形を呈し、高さ０．６ｍ強を測る比較的規模の小さな塚である。東側は既存の水路などに削平され、調査区外に伸びる可能性も考えられる。塚表面には、コンクリート製のランタウが置かれ、小ぶりな柿の木が生えていた。調査にあたっては、東西方向に断面観察用畦を設定するとともに、南北方向については試掘調査時に実施した断ち割り調査を利用して断面を確認しつつ掘削を行った。調査の結果、礫混じりのシルト層を積み上げて塚が形成されたことが判明した。また、この基部では水平基調のシルト層堆積が確認され、周辺の地形よりもやや高い地形を形成している。このシルト層については、人為的な積み上げに伴うブロック状の土塊の痕跡が確認されず、比較的均質な水平堆積を成すことから、旧地形の高まりの可能性が高いと判断した。このため、やや小高い旧地形を利用した塚の形成が想定される。

確認調査の成果

事前の確認調査に当っては、塚の形状改変の可能性を考慮して、現在地表に露出する塚の周囲にトレンチを配置した（図3－ 18）。結果的に塚の範囲が現況よりも広がることは無かったため、丘状の高まり部分について発掘調査を行った。

塚の形成過程

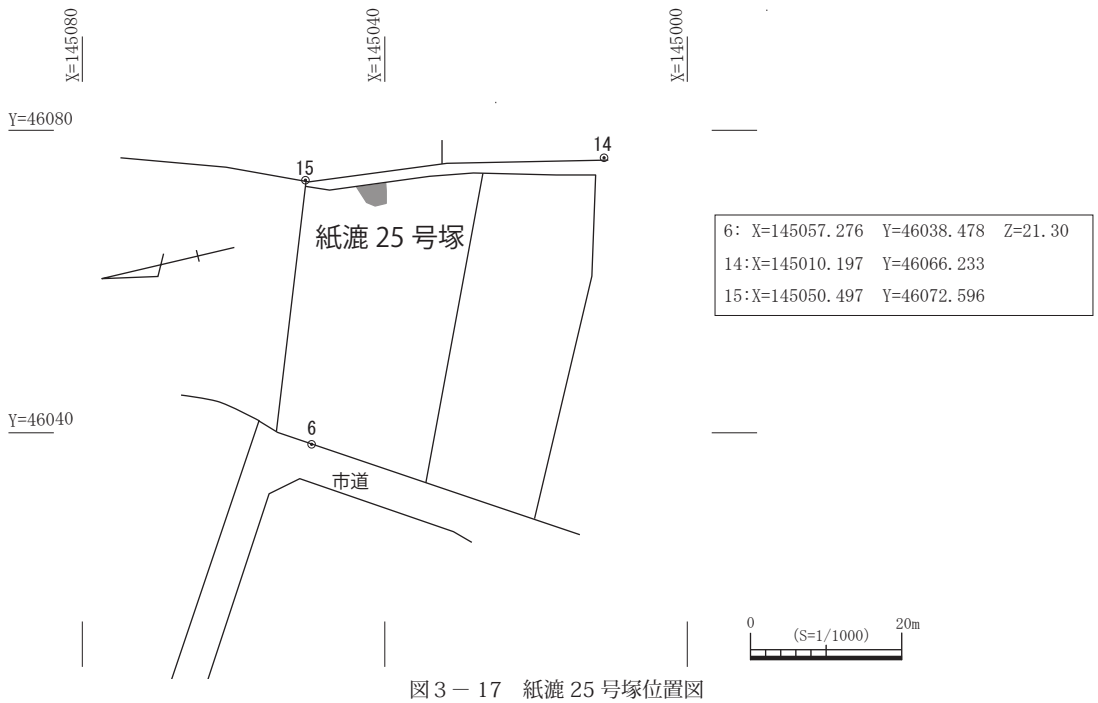


図３－１７　紙漉 25 号塚位置図

塚の基部は、上記のとおり水平基調にシルト層が複数確認され、これが基底となる。上部に多量の石材が混ざるシルト層から極細砂を積み上げ、塚の概形を作り出している。この礫混じりシルト層を掘り込み、砂岩円礫を用いた石囲い区画が形成される。削平に拠るためか、確認できたのは南西隅を中心とした１．５ｍほどの範囲である。また、礫混じりシルト層を掘り込み、塚の頂部付近で土器埋納遺構を確認した。土坑内に陶器製の壺を設置し、土師器製の蓋を載せ、さらに上部には扁平な砂岩円礫が重ねられるという厳重な埋納が確認された。出土状況では、蓋が割れて内部に落ち込んでいたが、土砂の流入は少なかった。また、内部が盗掘など攪乱を受けた様子も確認できず、壺内部は遺構の形成時の状況を留めているものと考えられる。

使用石材

石囲い区画を形成するのは、周囲の河川起源と考えられる砂岩円礫である。径２０～３０㎝程度と大きさが比較的揃っており、運搬の容易な石材が選ばれている。塚を形成する礫混じりシルト層中に含まれる石材も同様に砂岩円礫であるが、塚を主体的に構成するのは、風化の進行が顕著でない砂岩円礫が中心であるが、ごく少量の安山岩が含まれる。また、粒径・風化度合いもまちまちであり、偏差が認められる。

石囲区画

砂岩円礫を１～２段積み上げて区画が形成される。南西角部を中心に遺存している。角は明確な屈曲を持たず、平面隅丸方形を呈す。図化していないが、裏込めより近世の大型土師器片（野壺、井戸枠等か）が大量に出土しており、形成時期が近世よりも降ることが明確である。

土器埋納遺構

設置過程は上記のとおりである。調査前に塚上部に設置されたラントウのほぼ直下に位置することからも、この塚の中心的な遺構と考えることもできる。壺内部にはほとんど土砂が入り込んでおらず、骨などは本来含まれていなかったと考えられる。壺内に埋納されたのは、孔に釘を差し込んだ銭８枚であった。釘の錆着によって文字の判読が不可能なものも多いが、主体は寛永通

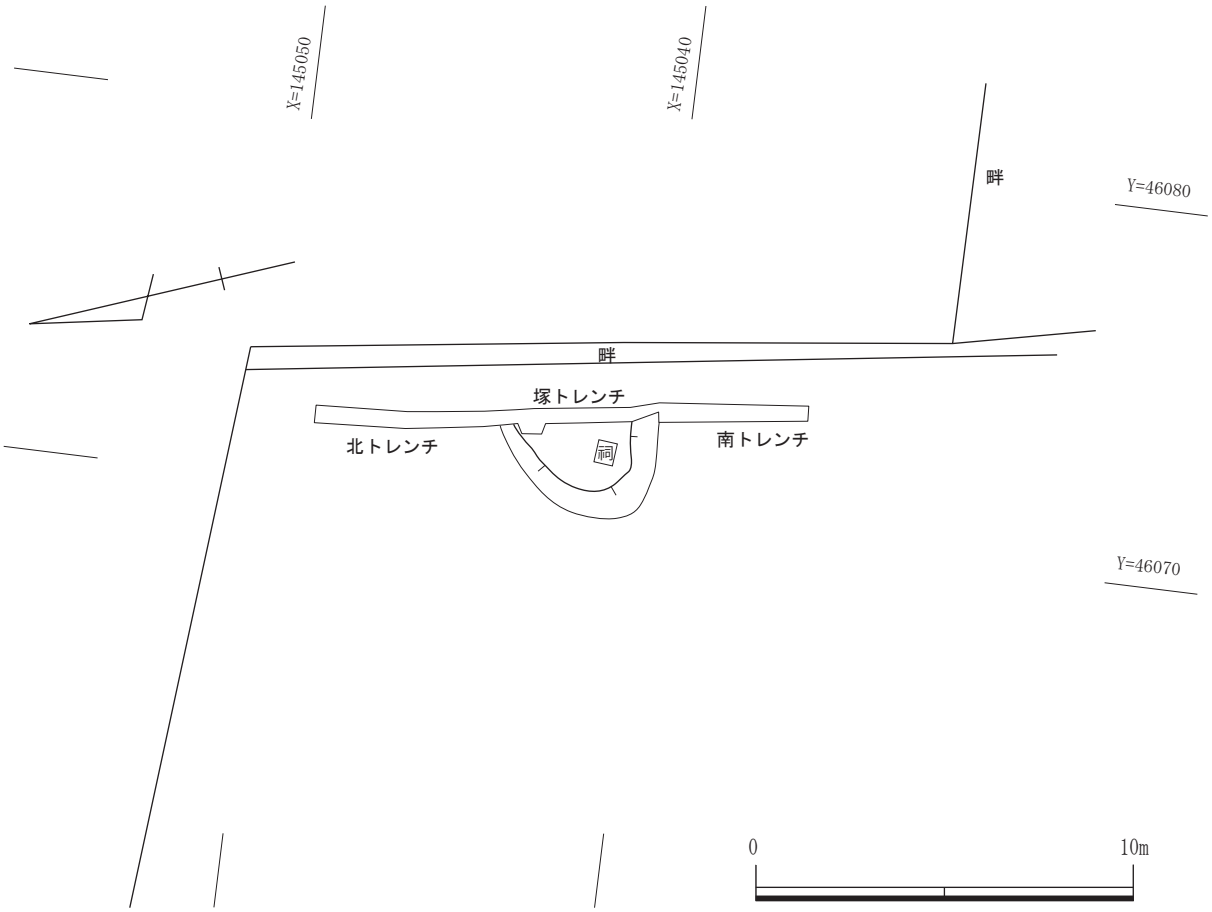


図３－18　紙漉25号塚試掘トレンチ位置図

宝である。

遺物

出土遺物の総量としては、近世以降の土師器類・瓦片が大量で、中世以前の遺物は客体的である。ただし、遺物の抽出に当たっては、中世以前の遺物を中心に行い、近世以降の遺物は年代推定が可能なもの及び塚の性格の把握のために必要と判断した特徴的な遺物を限定して図化した。このため、図示した資料は出土遺物の量的な傾向を示すものではない。

44～45、Ｍ１～Ｍ４は土器埋納遺構。44は土師質で、火消し壺の蓋。本来は摘みが付いた方を上にして使用するものであるが、図中には出土状況を反映して、摘みを下向きに配置した。摘みは手づくねで形成される。外面調整は入念なミガキ上のナデにより平滑に仕上げ。45は陶器壺。大谷焼の可能性が考えられる。濃褐色の陶器にくすんだ白～灰色の釉薬をほぼ等間隔で規則的に垂れ掛ける。底面調整はハケ状の工具で入念に平滑に仕上げられる。底面には外周沿いに４ヶ所十字に配置された胎土目と考えられる重ね焼きの痕跡。また、薄く砂目の痕跡も確認できる。頸部に接合痕があり、口縁部は貼り付けられた可能性がある。Ｍ１～Ｍ４は、45の内部にまとまって出土した。いずれも鉄釘を銭の孔に通した状態で出土した。釘の頭部は折り曲げられており、身部は断面方形を呈す、いわゆる和釘である。釘の錆着により、銭の文様は判読できる箇所が限られている。また、外形も錆の影響を受けており、面径も正確でない部分がある。判読できる範囲では、いずれも寛永通宝であり、背面に「文」の字を有すいわゆる文銭である。錆で判読できないものもあるため、確定は躊躇するが、現在の資料状況からは、同一種の銭のみで構成された

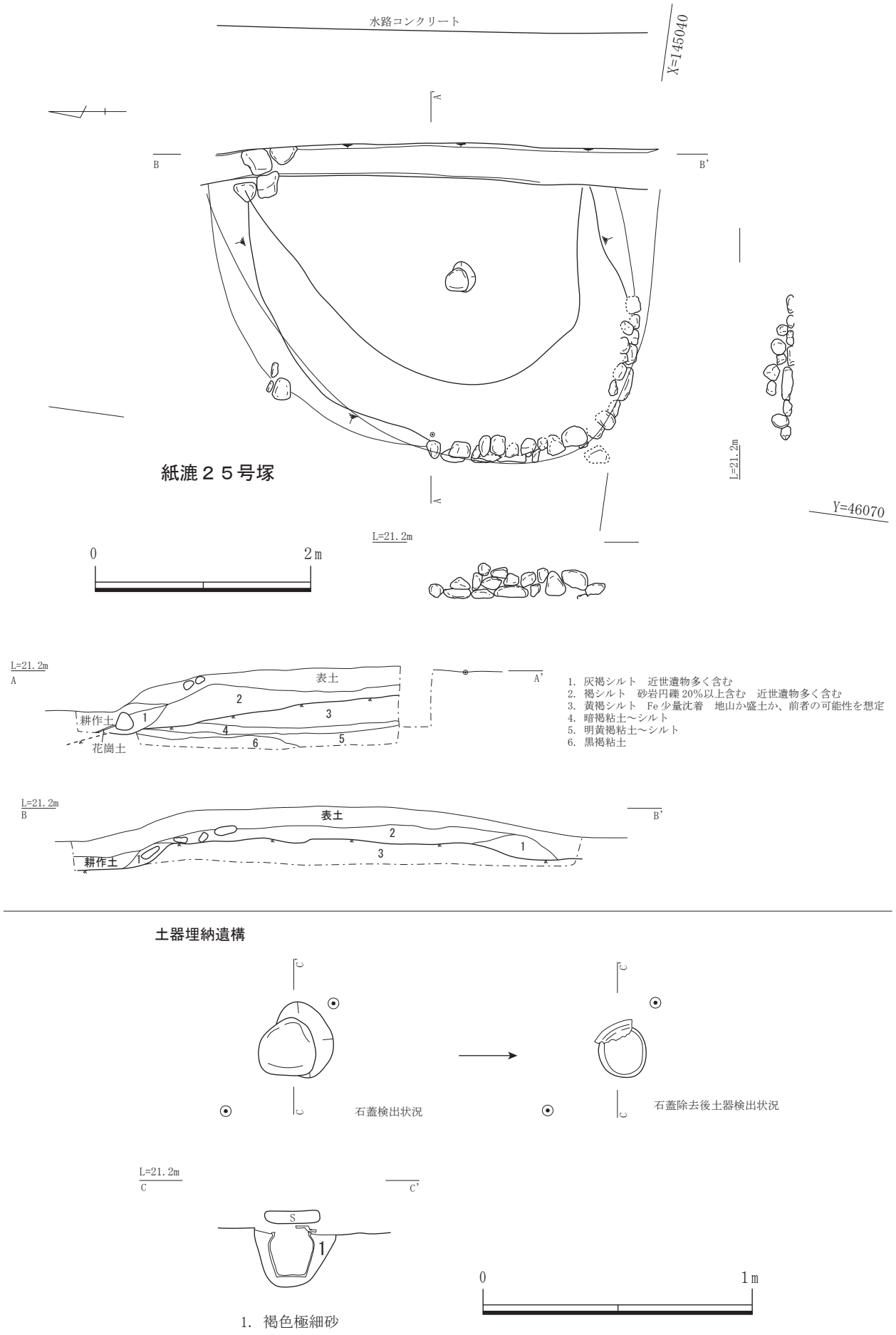


図３－１９　紙漉２５号塚平断面図

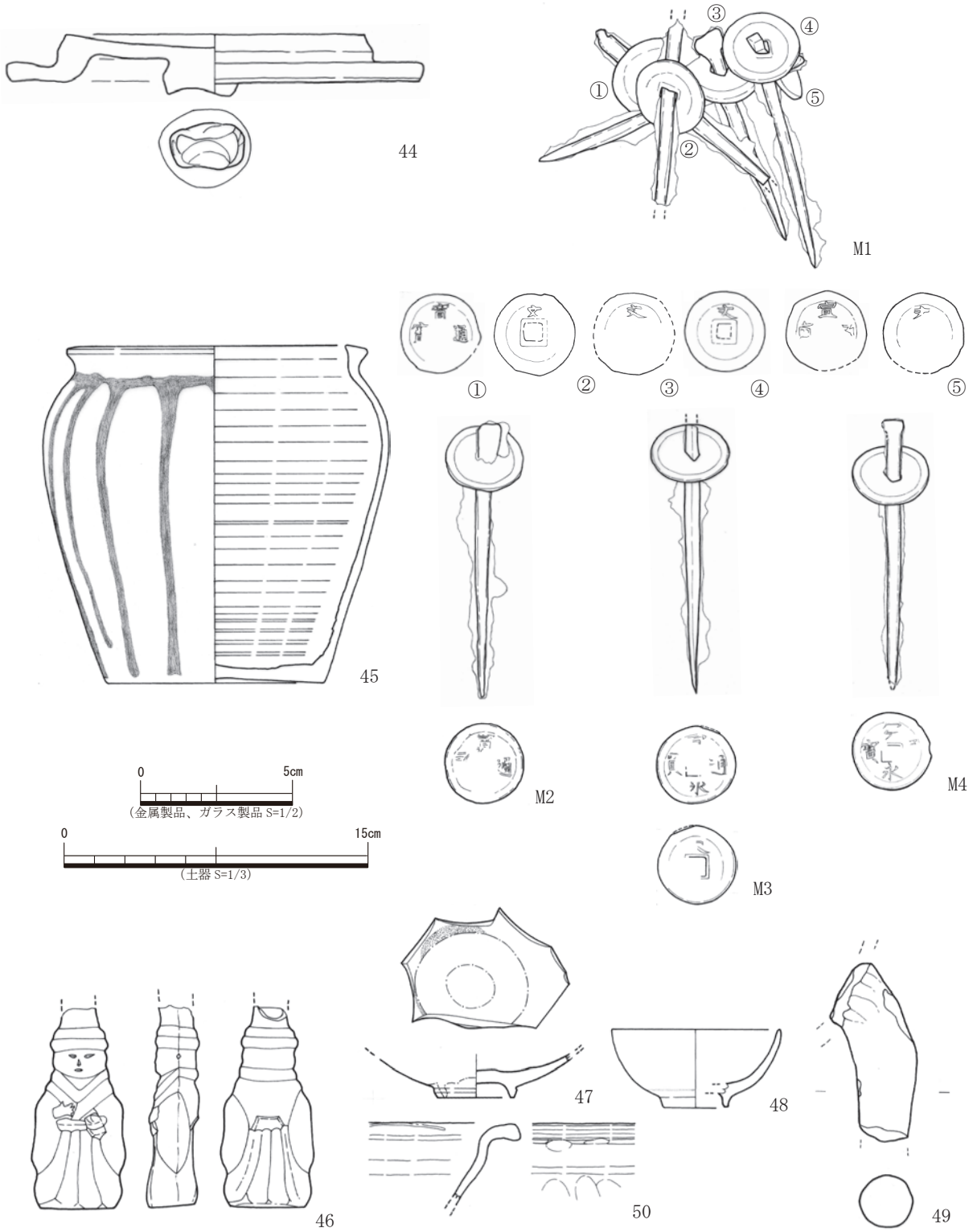


図３－20　紙漉 25 号塚出土遺物

埋納銭群と評価するのが妥当であろう。この際、文銭のみで構成されるセットは 1668 ～ 1697 年の年代観が想定される（鈴木 1999）。なお、枚数は８枚を数え、６枚一組のいわゆる六文銭とは枚数が異なる。枚数に地域性が発揮されたとされる地域も指摘されているが、讃岐の事例については今後の検討課題である。なお、いずれも保存処理は行っていない。46・47 は表土出土。46 はガラス製の像。両側面に型の跡。緩やかに垂下する服と帯、東部には帽子が表現され、手元には方形の物体を持つ様子。用途等は不明であるが、塚の性格の一端を表す可能性があるため図化した。47 は肥前系磁器碗の底部。粗製。見込みに蛇の目釉剥ぎ。文様、絵付け無し。48 ～ 50 は表土下礫混じり層（図３－１９－２層）出土。48 は肥前系磁器碗。外面に１条の直線の染付。粗製。49 は土師器足釜の脚部。50 は土師器焙烙。孔部の有無は確認できない。

小結

本塚は、石囲区画の背面から出土した遺物及び盛土中の遺物から、近世の築造であることが確実である。盛土中の遺物には陶磁器が少なく、時期の絞り込みが難しいが、肥前系磁器の登場（様相３（1640 ～ 50 年代））以降、瀬戸美濃系磁器の登場以前（様相７（18 世紀第４四半期～ 19 世紀初頭）の年代幅で理解しておきたい。また、本塚の主たる形成要因と考えられる土器埋納遺構内の埋納銭は上記の通り 17 世紀後半であるが、土器は 19 世紀であり、塚の形成時期はこの時期に近づけて考えておきたい。

＜参考文献＞
松田朝由 2010「興隆寺跡石塔群の五輪塔」『香川史学』第３７号　香川歴史学会
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡Ⅳ』空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『高松城跡（西の丸地区）Ⅱ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』

第4章　まとめ

第１節　遺構の変遷（飯田西１３～２５号塚）

調査対象である塚群の変遷を確認すると、確実に中世に遡ると考えられるのは１４号塚である。１２～１３世紀の築造が想定される。その後、近代に入り多量の円礫を集積して他の塚が形成されるとともに、１４号塚の上部にも集石がなされた。このため、塚は当初１基が中世に存在し、近代以降に数が増えたことがわかる。

これらの塚の形態上の特徴としては、高さに対して頂部の平坦面が少なく、錐形に切り立った外形を呈することが共通する。また、使用される石材もほぼ同質の風化のあまり進んでいない砂岩円礫を用いていることから、近代に調査地に多量に石材が供給される事態が発生したことが窺える。塚の形成を主目的とした意図的な集積か、その他の事業に伴い排出された石材の転用によるものかは不明である。周辺には塚の上部に石造物を安置する例も散見されるが、今回調査対象としたものについて、２３号塚上には石造物が認められたが、他の塚には伴わない。

第２節　塚の性格の多様性

飯田西１４号塚については、五輪塔を伴う低平な塚としての整備が形成の契機であった。こうした塚を一部形状改変して、新たに塚の整備が行われたのが近世末～近代にかけてである。

一方、近世末から近代に形成された集石の中から、二次的に移動した状況ではあるが、特徴的な遺物が１４号塚でまとまって出土している。土師器蔵骨器（２０～２３）と須恵器蔵骨器（19）である。

東四国地域の中世墓を集成した蔵本は、円筒形の土師器蔵骨器については、１４世紀中葉に出現し、小型化・粗雑化しつつ１６世紀にかけて使用されることを整理した（蔵本 2017）。例示された資料と比較すると、２０・２１は１５世紀代の資料と形態が類似することから、概ねこの時期の資料と考えることができる。

１９は須恵器短頸壺である。体部の稜が明瞭に屈曲するプロポーションから、９世紀代の年代が想定できる。香川県の事例を集成した佐藤は、蔵骨器として利用された事例が多いことを指摘する（佐藤 1993b）。今回の調査資料の中で最も古く位置付けられる遺物であり、ほぼ完形で出土していることからも、先行する蔵骨器を伴う遺構の存在が示唆される遺物である。

このように、遊離資料であるが、周囲に先行する埋葬関係施設があり、それらの改変、削平等を伴う行為として、近世末から近代の塚形成がなされたことが推測できる。単純な継承行為の結果の蓄積として塚が現存するのではなく、削平や改変といった具体的な行為を伴いながら、あるものは消失し、あるものは改変されて現代に継承されたのである。

このように、現在「塚」とひとくくりに登録された埋蔵文化財包蔵地、言い換えると地上に人為的に堆く土砂、礫を積み上げたことにより認知された遺構は、個別に多様な経歴を有していることが明らかになりつつある。近年調査した事例でも、古墳時代中期の古墳であった相作馬塚古墳が中世・近世にそれぞれ塚として形状の変更を受けた例や、中世に形成され、近世末～近代に改変された飯田西１４号塚、近世末～近代に新たに形成された飯田西１３・１７・１８号塚、紙漉２５号塚等がある。調査に当たっては、こうした多様な来歴を勘定に入れて、入念な試掘調査

と調査計画が必要である。特に現況は複数次の形状改変を受けた最終形であることを意識した調査が必要であろう。

参考文献
高松市教育委員会 2015『相作馬塚』高松市埋蔵文化財発掘調査報告第 157 集
蔵本晋司 2017「東四国地域における古代～中世墓の検討」『誉水中筋遺跡』香川県教育委員会
佐藤竜馬 1993a「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念　考古学論叢』
佐藤竜馬 1993b「讃岐における古代の火葬墓」『財団法人香川県埋打像文化財調査センター研究紀要』Ⅰ
佐藤竜馬 2009「初期高松城下町の在地的要素」『中世讃岐と瀬戸内世界　港町の原像：上』
松本和彦 2009「野原の景観と地域構造」『中世讃岐と瀬戸内世界　港町の原像：上』

調査前の現地遠望（冬季、南東から）

写　真　図　版

真夏の調査風景

写真図版１

飯田西１３号塚調査前状況（南から）

飯田西１３号塚表面清掃後状況（南から）

飯田西１３号塚東西断面（南から）

飯田西１３号塚南北断面（西から）

飯田西１３号塚調査中遠景（南東から）

飯田西１３号塚アゼ中の石造物（南から）

飯田西１３号塚　塚の規模（南西から）

飯田西１４号塚調査前状況（東から）

飯田西１４号塚表面清掃後（南東から）

飯田西１４号塚　表面清掃後（北東から）

飯田西１４号塚南北断面（東から）

飯田西１４号塚東西断面（北から）

飯田西１４号塚　石造物検出状況（北東から）

飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（南から）

飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（北から）

飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（北西から）

飯田西１４号塚　石囲区画墓検出状況（南東から）

飯田西１４号塚　五輪塔地輪地輪と火輪（北東から）

飯田西１４号塚　完掘状況（東から）

飯田西１４号塚　中央土坑検出状況（南から）

飯田西１４号塚　中央土坑断面（北東から）

飯田西１４号塚　中央土坑完掘状況（南から）

飯田西１４号塚　中央土坑完掘状況（東から）

飯田西１７号塚　調査前状況（南から）

飯田西１７号塚　表面清掃状況（南から）

飯田西１７号塚　東西断面（北から）

飯田西１７号塚　完掘状況（南から）

飯田西１８号塚　調査前状況（北から）

飯田西１８号塚　表面清掃状況（北から）

飯田西１８号塚　東西断面（北から）

飯田西１８号塚　完掘状況（北から）

飯田西２３号塚　調査前状況（南西から）

飯田西２３号塚　表面清掃状況（北西から）

飯田西２３号塚　断面（南西から）

飯田西１４号塚　石造物集合

飯田西１３号塚　石造物集合

飯田西１４号塚　出土遺物集合

飯田西１４号塚　須恵器蔵骨器か

飯田西１４号塚　土師器蔵骨器

紙漉２５号塚　調査前状況（南から）

紙漉２５号塚　表面清掃状況と規模（南西から）

紙漉２５号塚　石囲区画検出状況（南西から）

紙漉２５号塚　礫混層除去状況（南西から）

紙漉２５号塚　土器埋納遺構検出状況

紙漉２５号塚　土器埋納遺構石蓋検出状況

紙漉２５号塚　土器埋納遺構土器蓋検出状況

紙漉２５号塚　土器埋納遺構　内部の銭・釘（簡易クリーニング済状況）

紙漉２５号塚　南北断面（南西から）

紙漉２５号塚　東西断面（南西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いいだにし 13 ごうつか・いいだにし 14 ごうつか・いいだにし 17 ごうつか・いいだにし 18 ごうつか・いいだにし 23 ごうつか　かみすき 25 ごうつか
書　　名	飯田西13号塚・14号塚・17号塚・18号塚・23号塚　紙漉25号塚
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第213集
編著者名	高上　拓
編集機関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦 2019 年8月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いいだにし 13 ごうつか・いいだにし 14 ごうつか・いいだにし 17 ごうつか・いいだにし 18 ごうつか・いいだにし 23 ごうつか 飯田西13号塚・14号塚・17号塚・18号塚・23号塚 かみすき 25 ごうつか 紙漉25号塚	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 いいだちょう 飯田町 だんしちょう 檀紙町	37201		34° 19′ 17″	133° 59′ 58″	2018．7．9～2018．7．26 2019．12．3～2019．12．5	66㎡ 6㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
いいだにし 13 ごうつか・いいだにし 14 ごうつか・いいだにし 17 ごうつか・いいだにし 18 ごうつか・いいだにし 23 ごうつか 飯田西13号塚・14号塚・17号塚・18号塚・23号塚	塚	中世 近世	石囲区画墓塚（集石）	土師器・陶磁器・石造物（五輪塔）	石組区画墓と石造物
かみすき 25 ごうつか 紙漉25号塚	塚	近世	石囲区画墓	土師器・陶磁器・瓦・銭	土器埋納遺構内に銭7枚

要　　約	高松平野西部に所在する塚群の発掘調査。宅地造成に伴う記録保存を実施した。 飯田西13～23号塚について、14号塚は中世の石囲い区画墓であり、墓上に設置された五輪塔が倒壊した上に、近世以降に川原石を積み上げて塚状の高まりを形成したことが判明した。それ以外の塚については、近世以降の集石が遺構形成の契機であったことを確認した。 紙漉25号塚について、中世の土器を含みつつ、近世に形成された塚であることが明らかになった。塚上部には土器埋納遺構が確認され、内部から鉄釘を孔に刺した状態の銭が8枚出土した。

高松市埋蔵文化財調査報告第213集

飯田西13号塚・14号塚・17号塚・18号塚・23号塚
紙漉25号塚

2020 年5月 29 日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番 15 号
発　行　高松市教育委員会・アイラックホーム（株）・（株）ロータリーハウス
印　刷　有限会社　中央ファイリング